

上別府遺跡
お染ヶ岡地区特殊農地保全整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

上 別 府 遺 跡

1979

宮崎県教育委員会

お染ヶ岡地区特殊農地保全整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

上 別 府 遺 跡

1979

宮崎県教育委員会

序

近年、宮崎県においても、地域開発はまことにめざましく、市街地周辺の宅地造成、工場用地の造成のみならず、農業基盤整備事業、九州縦貫自動車道建設等、農山村部においても著しいものがあります。

これらの開発に伴なって古代遺跡が消滅するのを未然に防止し、できる限り後世に文化遺産として残すのが現代人の務めであります。

今回、高鍋町のお染ヶ岡地区特殊農地保全整備事業に先立ち、事前発掘調査を行い、遺跡の性格等を明らかにしました。本報告書は、この発掘調査の記録で学術資料として、また社会教育・学校教育の資料として広く活用されることを期待するものであります。

最後に、この調査にあたり、御協力いただいた児湯農林振興局・高鍋町教育委員会をはじめ、地元の方々に対し、厚くお礼を申し上げます。

昭和55年3月31日

宮崎県教育長

四 本 茂

例　　言

1. 本調査報告書は、県児湯農林振興局の
　　お染ヶ岡地区特殊農地保全整備事業
　　に伴う事前発掘調査として宮崎県教育
　　委員会が昭和54年8月8日から同月
　　29日まで実施した児湯郡高鍋町大字
　　持田上別府遺跡の報告書である。
2. 本稿の執筆には各調査員が分担して
　　あたり、本文末尾に執筆者名を記した。
3. 掲載の実測図は各調査員が担当し、
　　図版については岩永が担当した。
4. 編集は県文化課が担当した。

本文目次

Iはじめ	(1)
II立地と環境	(2)
III遺構	(2)
1 穴住居群	(2)
2 柱穴群	(6)
3 溝状遺構	(7)
IV遺物	(8)
1 土器	(8)
2 石器	(17)
3 第7号住居跡出土木材炭化物について	(20)
V結語	(21)

挿図目次

第1図 遺跡位置図	(2 8)
第2図 上別府遺跡地形図	(2 4)
第3図 遺構配置図	(2 5)
第4図 1号住居跡実測図	(2 6)
第5図 2号住居跡実測図	(2 7)
第6図 3号住居跡実測図	(2 8)
第7図 4号住居跡実測図	(2 9)
第8図 5号住居跡実測図	(3 0)
第9図 6号住居跡実測図	(3 1)
第10図 7号住居跡実測図	(3 2)

第 1 1 図	8号住居跡実測図-----	(3 3)
第 1 2 図	9号住居跡実測図-----	(3 4)
第 1 3 図	溝状遺構横断面実測図-----	(3 5)
第 1 4 図	1・2号住居跡出土土器実測図-----	(3 6)
第 1 5 図	3号住居跡出土土器実測図-----	(3 7)
第 1 6 図	4・6号住居跡出土土器実測図-----	(3 8)
第 1 7 図	7・8号住居跡、溝状遺構、ピット群出土土器実測図-----	(3 9)
第 1 8 図	一括土器(1)実測図-----	(4 0)
第 1 9 図	一括土器(2)実測図-----	(4 1)
第 2 0 図	一括土器(3)実測図-----	(4 2)
第 2 1 図	一括土器(4)実測図-----	(4 3)
第 2 2 図	1・3・4・5号住居跡出土石器実測図-----	(4 4)
第 2 3 図	5・6号住居跡出土石器実測図-----	(4 5)
第 2 4 図	6・7号住居跡及び周辺出土石器実測図-----	(4 6)
第 2 5 図	周辺出土石器実測図-----	(4 7)

図 版 目 次

図版 1	(1) 表土除去作業-----	(5 1)
	(2) 表土を除いた状況-----	(5 1)
図版 2	(1) 1号住居跡-----	(5 2)
	(2) 1号住居跡内土築器出土状況-----	(5 2)
図版 3	(1) 住居跡群状況-----	(5 3)
	(2) 2号住居跡出土須恵器-----	(5 3)
図版 4	(1) 3号住居跡出土土築器-----	(5 4)
	(2) 4号住居跡-----	(5 4)
図版 5	(1) 4号住居跡出土土築器-----	(5 5)
	(2) 6号住居跡出土石錐-----	(5 5)
図版 6	(1) 7号住居跡-----	(5 6)
	(2) 7号住居跡内炭化材-----	(5 6)
図版 7	(1) 溝状況-----	(5 7)
	(2) 溝堆積土内土築器-----	(5 7)
図版 8	出土土器 (1)-----	(5 8)
図版 9	〃 (2)-----	(5 9)
図版 10	〃 (3)-----	(6 0)

圖版 1 1	出土土器	(4)	-----	(6 1)
圖版 1 2	"	(5)	-----	(6 2)
圖版 1 3	"	(6)	-----	(6 3)
圖版 1 4	"	(7)	-----	(6 4)
圖版 1 5	"	(8)	-----	(6 5)
圖版 1 6	"	(9)	-----	(6 6)
圖版 1 7	"	(10)	-----	(6 7)
圖版 1 8	"	(11)	-----	(6 8)
圖版 1 9	出土石器	(1)	-----	(6 9)
圖版 2 0	"	(2)	-----	(7 0)
圖版 2 1	"	(3)	-----	(7 1)

I はじめに

この地区は、昭和54年度県児湯農林振興局によりほ場整備事業が行なわれることになっていた地区で、以前から土器等の出土する地区であった。そこで、ほ場整備事業が開始される前に遺跡の状況を把握しておく必要があり、54年度の事業として遺跡確認調査を実施したわけである。

発掘調査は、昭和54年8月8日から8月29日まで行なった。

調査手順としては、まず初めに対象地区が畑であることから、耕土である第1層をブルドーザーにより剥取り、安定した層とみられる第2層から調査することにした。

ブルドーザーにより、耕土を取り除いた所、方形状竪穴、柱穴群、溝状遺構が次々と姿をあらわし、住居群の存在していたことがわかった。

調査関係者は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

(事務局) 教育長 四本 茂

教育次長 坂口 鉄夫

〃 国府 重則

文化課長 日高 三好

課長補佐 串間 実

庶務係長 田中 君彦

主任主事 王原 敦美

文化財係長 山下 正明

主任主事 岩永 哲夫 (調査担当)

〃 小森 連郎

〃 立元 久夫

〃 今村 正人

(調査員) 日高 正晴 (県文化財保護審議会委員)

田中 熊雄 (宮崎大学名誉教授)

田ノ上 哲 (日南市立蘇肥小学校教諭)

永友 良典 (県立高千穂高校教諭)

渡辺 康隆 (小林市立三松小学校教諭)

岩永 哲夫 (文化課主任主事)

小森 連郎 (〃)

(調査補助員) 長津 宗重・諸方 博文

調査協力者 高鍋町教育委員会・児湯農林振興局・小丸川土地改良区

土地所有者永友正光氏には調査に関して多大の御協力をいただいた。記して謝意を表すものである。

また、7号住居跡内出土炭化材について、宮崎大学農学部大塚城講師に鑑定を依頼し、玉藻をいただいた。

石器の石質については、県総合博物館宮脇繁氏の御教示を得た。（岩永 哲夫）

II 立地と環境

小丸川は下流地域で高鍋町をかすめて日向灘へ注いでいるが、この川を挟んで左岸台地上に持田の大古墳群が点在している。上別府遺跡はこの古墳群台地の東側、国道10号線が平地部から坂道にかかる家床地区の直ぐ上の台地上に位置している。その台地の標高は約50mである。この地域にお染ケ岡地区特殊農地保全整備事業の一環としては場整備が行われることになり、その事前調査として、この発掘調査が計画された。この遺跡から国道を越して西側台地上には計塚などの大前方後円墳をはじめ、幾々たる古墳が85基も点在しているが、さらに、この小丸川を少し遡った川南町西別府には約50基の川南古墳群がある。また、高鍋町全体では約150基の古墳を数えることができる。このように考察すると、この上別府遺跡は古墳群地帯の中に位することになる。また、昭和41年7月には県教委主催にて持田古墳群台地で弥生式遺跡の発掘調査が行われ、弥生式後期の住居跡2箇所を発見した。

（日高 正晴）

III 遺構（第3図）

本遺跡の遺構としては、9軒の竪穴住居群、及び西方に発見された高床、あるいは平地式住居を想起させるピット群、及びその中に存在した溝状遺構の三つに大別されるが、順を追ってこれらについて記し、その相互の関係について考えてみることにする。

1 竪穴住居群

竪穴住居跡は9軒を検出できたが、期間や発掘区の制約のため、完掘できたのは1号、3号、4号、5号、7号、9号の6軒だけであった。農耕による削平や、ブルドーザーの表土排除による削平のために、全て、原地表面を確認することはできなかった。出土遺物数は多いとは言えず、相互の構築時期の差異を明確にすることは困難であるが、一部に切り合いも見られ、その部分については、多少の前後関係を推定することも可能である。なお、本文中の住居跡の号数は発見順に命名したものである。

(1) 1号住居跡（第4図）

1号住居跡は発掘区の東端に位置し、南北線で見ると、やや北寄りに当るところで発見された。第4図のように、ほぼ東西南北に方位し、東西4.6m、南北5.2mのやや不整な隅丸方形を呈している。プランは赤ホヤ層に上部の黒色土が入り込んだ形で発見されたが、前述の如く、削平のため赤ホヤ層が非常に薄くなってしまっており、形状の把握には困難を要した。ほぼ中央に L 3.5m × W 8.5m で、ほぼ南北円状の細かい炭を含んだ焼土の分布が見られ、おそらくここが炉跡と考えられる。床面は褐色粘土層で、これは他の住居跡もほぼ同様である。壁の上部は赤ホヤ層から掘り込まれているが、現存壁高は 1.5 ~ 2.0cm である。ブルドーザーや農耕による赤ホヤ、黒色土層の削平を考慮に入れると、原型では 4.0cm 内外の壁高を有していたのではないかと考えられる。

柱穴は 1 個が検出されたが、いずれも床面から 4.0 ~ 5.0cm 内外の深さを持っており、北西の 2 個と、南西の 2 個はいずれも互いに切り合った状態であった。また、11 個すべてが同一のプランを形づくりとは考えられず、或いは建てかえられたのかも知れない。

柱穴のうち、北東隅の 1 個の上部には甕がつぶれた形で存在していた。その他には、南東隅に近い所に甕が、また、南壁近くのほぼ中ほどに、壺頸部と須恵坏が発見された。

本住居跡の屋根組みとしては、柱穴の状態からみて、寄棟構き下しの形状が想起される。

(2) 2号住居跡（第5図）

2号住居跡は 1号の南 5m の所に存在した。発掘区の制約上、南西隅を中心とした、北東 4.1m 南西の線、北西 2.8m 南東、南北 5m の三角形の中にしか調査できなかった。南西隅は 2.0cm ほどで、3号住居跡の東壁と接続していた。おそらく、小さくとも一辺 4.5m 程度の隅丸方形になるのではないかと思われる。また、方位は北東 - 南西、北西 - 南東になるものと考えられる。

壁高は 2.0 ~ 2.5cm を示し、上から赤ホヤ層 7cm、赤ホヤと混色土の混入 1.2cm、褐色土 4.5cm の厚さを量していた。柱穴は 1 個だけ存し、径は 4.0 × 3.8cm ほどで、床面から 2.0cm の深さまで掘り込んでいた。

遺物としては、須恵坏が二つに割れた形で発見されたほかは、ほとんど破片のみであった。

(3) 3号住居跡（第6図）

3号住居跡は前述したように、2号と極めて近接した位置に発見された。方位はほぼ東西南北で、若干東に寄っている。プランは東西で 5.0m、南北で 3.5m の隅丸長方形で、南西隅の部分が 5.0 ~ 7.0cm ほど 4号住居跡に切り込む形になっていた。従って、3号の床面は 4号よりも約 1.0cm 深い所にあった。

堆積土は上部から黒色土、黒褐色土、褐色粘土を含む黒色土の順で統いており、床面は褐色土であった。厚さは全部で 2.0cm ほどで、柱穴の検出は見られなかった。ほぼ東西線の中央、北壁から 4.0cm の所に掘り込みが見られ、その上部は粘土で構築してあった。その層位は上から 1.0cm 内外の焼土まじりの黒色土、次もやはり 1.0cm ほどの黒褐色土、さらに 1.0 ~ 1.5cm 厚さの淡褐色土と続き、地山は黄褐色の粘土層で、ほぼ床面と似た色調を呈していた。最上部はかなりの傾斜が見られるものの、5 ~ 1.5cm 程度、住居跡の掘り込み面から下がるが、削平を考慮に入れると元はもう

少しあったものと思われる。床面から掘り込み最下部まではおよそ 25 cm 程度を測り、一部 30 cm 程度の箇所もある。なお、掘り込み上部はほぼ床面と一致している。掘り込みの径は 8.0 cm × 8.0 cm で隅丸方形状を呈している。掘り込みの縁に立てかけたような形で径 15 cm ほどの丸底の甕が埋設してあった。周囲を粘土で固めた状態なので、カマド（この構築状態をカマドと見るなら）の焚き口に据えられていたものであろう。ほぼ完形に近いものである。

さて、このカマド？であるが、内部には甕が 1 個体分、破碎していることなどを考えると、炉というよりもカマドを思わせるものがある。しかし、はっきり断言できるほどの証左もない。

他の遺物としては、南東隅、南壁に近いところに、5.0 × 8.5 cm ほどの平たい石が置かれており、すぐ東側に径 10 cm の丸い石があった。そして、前述の石とカマドとの間に甕の破片が散在し、一部はすぐ石の傍まで来ていた。

柱穴の検出も無かったので、屋根組のプランを推定することは不可能であるが、生活の痕跡は本住居跡が一番顕著であった。堆土の状態がよく観察できたのも、本住居跡である。

(4) 4号住居跡（第7図）

前述の如く、3号に南東隅を切り取られた形で発見された。北東隅の掘り込みが顯著でなく、全形を明らかにすることが難しかったが、東西 6.6 m、南北 8.2 m を測り、住居跡群中最大である。軸は 3号よりも東西南北の方位に近く、ほぼ一致していた。

堆土は上部から 20 cm の厚さで、黒色土、黒褐色土（褐色粘土混入）の二層に分かれ、黒色土中には現地表に近い部分からの掘り込みと見られる擾乱が存在した。床面は黒褐色土で、東西のセクションでは堆積状況は明確に観察されない。

柱穴は 12 個の検出をみたが、北壁、東壁、南壁に近い 5 個はプランとして把握できるが、西壁中央寄りの数個は他に比して小さく、同一プランを構成するものとは思われない。先の 5 個をつなぐと 3.5 m × 5 m 程度のプランが想定できる。

遺物はほぼ中央に、縱割りの状態の甕があったほか、北西隅の壁際で石錐が 1 個存在した。他に、Ⅲ期ごろのものと思われる須恵器が西壁北西隅に近いところで発見された。

(5) 5号住居跡（第8図）

5号住居跡は 4号のすぐ南、約 3 m を隔てて発見された。ほぼ東西南北に正方位し、東西 4.1 m、南北 4.5 m、正方形に近いプランを持っている。この付近では削平が著しく、6号とともに縁の検出に手間取ったし、遺物もきわめて少数の土器片しか残存していないかった。5個の柱穴を持つが、四隅を担う 4 個の間隔は 220 ~ 270 cm を示している。プランと柱穴の状態からみて、排下しの寄棟になるものと考えられるが、南部に張り出しが見られるので、ここを入り口にしていたものと思われる。

(6) 6号住居跡（第9図）

6号住居跡は 5号の西 1 m 足らず、4号の南 8 m ほどの所に壁を接していた。南部に、前にブル

ドーザーが表土をはいだ際の土置き場があり、高さ約8mほどにも達していたために、南縁の検出は不可能であった。東西幅は北壁で4.9m、南北幅は南縁が出ていないが、調査した所までが5.1mであった。これから考えると、南北に長い隅丸長方形を呈すると思われる。

柱穴は中央から北東隅にかけて6個が検出できた。うち1個は中央寄りのもので、南北15.0cm東西14.0cmのほぼ橢円状の掘り込みの北壁に接した状態である。この掘り込みの南壁近くにも不整形のピットが存在し、掘り込み外のすぐ南側にも1個の柱穴が検出された。しかし、これらは全て、住居跡の東半分に限定され、西半分からは全く検出できなかった。

遺物はほとんどが石製品で、5本の溝を有する砥石、石錐8個が出土し、石錐のうちの1個は掘り込み内部から出土した。土器は土師片が数点と、須恵器の甕片が出土したのみである。

上記のように、柱穴が東側にしか存在しないことと、南側の壁が不明なことで、屋根組みを推定することは不可能である。なお、堆土の厚さは床面まで10cm内外を示しているが、上部はほとんど削平されている。柱穴の深さは床面から20cm程度であるが、東側の3個の中には30cmを超えるものもある。

(7) 7号住居跡(第10図)

7号住居跡は発掘区の中央を東西に走る溝のすぐ西側に位置している。東隅が一番溝に近く2.2mを隔て、4号の南西隅とは8.5mほどを隔てている。方位は北東一南西で、四隅が東西南北とはほぼ合致している。形状はほぼ正方形で、北西-南東4.1m、北東-南西4.0mを測るが、北隅に長さ0.7m、幅2.1mの張り出しを持った。この張り出しのほぼ中央部に北壁から南隅の方向に、長さ1.4mの突出部があり、床面から15cm程度高くなっている。北壁での幅8.0cm、最小幅2.0cmで、最大幅は5.0cmを測り、ちょうど、平根三角錐のような形をしている。さらに、床面上には放射状に炭化材がみられるが、特に壁際や四隅のものがよく残っていた。並び具合からみて、寄棟の構と思われる。宮崎大学農学部の大塚誠講師によれば、用材はコナラとのことである。

堆積状態は上部から黒土層、黒褐色土層の順に重なり、床面まで15~25cmの厚さであった。しかし、8号ほどの明確な状態は把えられない。

遺物の中で顕著なものは、東壁寄りの掘り込みから出土した小型丸底壺の頸部のみで、ほとんどが破片であった。この掘り込みの径は5.0cm×7.0cmで、隅丸長方形を呈し、深さは10cmであった。

柱穴は2個存在したが、中央のものは堆土上面からの掘り込みが明らかで、最下部も床面から5cmの深さしかないとみても、本住居跡に伴うものとは考えられず、住居跡の東壁外、溝との間に並ぶ2個と関連づけられる。従って、本住居跡には1個の柱穴しか見当らず、炭化材をとり除いた跡からも検出できなかった。

(8) 8号住居跡(第11図)

8号住居跡は7号住居跡のほぼ北方1.9mほどの所にあった。しかも、7号と6号の間を南北に走る溝によって分断されており、溝の最北端は住居跡の内部まで達し、そこから東西にもう一本の

溝が走っていた。つまり、この住居跡内では 2 本の溝が T 字形に交差していたことになる。従って当然にもこの 8 号住居跡は溝が掘られる以前から存在していたことが実証された。しかしながら、住居跡の北方への広がりは、溝の畠まで続く様子で、今回の発掘区に含まれないために、全容を明らかにすることはできなかった。結局、東西 5.3 m の幅は確認したが、南北は約 4.5 m 幅を発掘したのみである。堆土は 5 cm ~ 1.8 cm と削平の状態によって厚さが一様でなく、他の住居跡よりも削平の影響を如実に示していた。

遺物は、須恵壺片 2 点の外、見るべきものはなかった。柱穴らしいものは、南西隅、プラン外に 1 個あったのみである。溝の内部の堆土はやや灰色がかった黒色を示し、耕作の影響を受けていることがうかがわれる。なお、溝の深さは床面から 1.0 ~ 1.5 cm ほどであった。

(9) 9 号住居跡（第 12 図）

9 号住居跡は 7 号の西方 1.4 m の地点で発見された。発掘区の西端に近い所で、2.5 m × 8 m を計測できるごく小さなものであった。遺物もカメの口縁部が出土したのみであり、柱穴も 1 個だけであった。もっとも、住居跡の周囲には多数のビットが発見されたが、積極的に本遺構と関係づけられる点は見出せなかった。

2 柱穴群（第 3 図）

本調査では、今まで記してきた竪穴住居群のほかに、かなりの数にのぼる柱穴群を発見した。主として、発掘区の中央を南北に走る溝状遺構の西側で発見され、その数は 100 個を超える。もっとも全部が柱穴として使用されたとも思えないし、全てが同時期のものともいいきれない。しかし、何回かの建て替えがあったことを考慮に入れても、数棟の建築物があったことは確実であろう。その中でも、プランとして把握できたものは 8 棟であった。

一番北寄りの 1 棟は、8 号住居跡から約 5 m 西にある。2 間四方に柱穴がたどれるが、うち北寄りの真ん中のものは、後世の溝によって失われたものと思われる。柱穴の直径は 3.0 ~ 3.5 cm 程度で、発掘時の地表面から、4.0 ~ 5.0 cm 堀り込まれていた。柱穴の間隔は東西軸で 2.0 m、南北では 1.8 m を示し、ほぼ東西南北に方位している。東側に 1.8 m を隔てて、2 つの同様な柱穴があり、その隔たりはほぼ 3.6 m を示し、ちょうど、東西の柱列を延ばした位置にある。このことから考えて、この建物は東西を妻とする切妻の高床式倉庫ではなかつたかと思われる。（第 3 図⑦）

また、7 号住居跡の西方 2 m の所にも、きちんと並ぶ柱列があり、東西では 2 m、南北では 1.8 m の間隔に並んでいた。もっとも、この柱穴群は第 3 図⑦のものにくらべて、少し東へ振ったような方位を呈している。柱穴の深さは 4.0 ~ 5.0 cm 程度であるが、直径は 2.5 ~ 3.5 cm であった。この遺跡では北の方が高く、わずかに南方へ傾斜しているので、レベル値で比較すると、3 図⑦よりも幾分深くなる。（第 3 図⑧）

さらに7号住居跡のすぐ東に、一部は7号住跡に切り込む形でもう1棟が存在したようであるが、明確には把握できなかった。しかし、6個の柱穴のうち1個は、7号住居跡の堆土に掘り込まれて床面下まで達しているので、この建物が7号住居跡より後のものであることは疑いない。（第3図⑥）

⑦の建物の周辺にはまだいくつかの柱穴があり、並んでいるものもあるが、いずれも線としてしかとらえられず、⑦に関係するのか、それとも別個の建築物なのかは不明である。そのほかのピットについても精査すれば、何らかの規則性がたどれたかも知れないが、切り合いや並びの重複があるようで、一つのプランとしては把握できないまま終った。住居跡群や、溝状造構との位置関係、遺物の比較からみると、おそらく高床倉庫と思われるが、そうだとすれば、宮崎県に於いて、住居と倉庫が同一遺跡から見つかったのは初めてである。

3 溝状造構（第3図）

発掘区をほぼ半分に分ける形で、南北に走る溝が存在した。また、西寄り、ピット群の中を南北に走る溝も発見された。

まず、中央の溝は2本から成っているが、互いに交差しながら、ある地点では1本になり、また2本に分かれているように見える。1本は8号と切り合い、さらに8号の中で東西に走るもう1本の溝と交差するなど複雑な形状である。また、ほとんど傾斜がないことから考えて排水溝ではなく、何らかの境界を示すものではないだろうか。溝の深さがそれほど深くなく、25cm~45cmを示していることや、溝内に比較的遺物が少いこと、堆土の状況（第13図①~⑤）によってもそのことが言える。或いは倉庫と居住区を分けていたのかも知れない。しかし、いずれにしても、もっと広範囲を調査し、集落としての実態が明らかにならなければ、性格づけは困難であろう。

西側の溝は幅・深さとも小規模で遺物も少なく、堆土も耕土と一致することから考えて、後世のものと思われる。（第3図⑥）

以上、本遺跡の造構について述べてきた。時期決定の手がかりは少量の須恵器しかないが、それはⅢ期のものと考えられる。また、切り合いで、住居跡個々、また、高床や、溝状造構とに幾つかの年代のずれは考えられるが、それほど年代差があるとは考えられず、ほぼ同時期と比定してもよいのではないかだろうか。限られた面積の中で、集落としての実態はつかめようはずもなく、あくまで一部が陽光にさらされたにすぎない。従って、種々に遺構の性格づけをすることはできないが、Ⅲ期を中心とした時期のものとするのが妥当ではないだろうか。

（田ノ上 哲）

IV 遺物

1 土器

今回の発掘調査で土器の出土は、5号住居跡を除く7つの住居跡と溝状遺構、ピット群でみられたが、数的には、3号住居跡と4号住居跡で十数点あったが、他は4、5点の出土しか数えられなかつた。種類は壺・甕・环・鉢・それと受部を有する須恵器と土器器の坏である。特筆すべき土器では、この坏と木の葉底の底部・烈点文を施した繩文の土器片がある。また、中心遺構から北西に20m程離れた地点で工事中に発見された一括土器も數十点紹介する。この一括の土器の中には、二重口縁部の破片、高坏等がみられる。

本書では、遺構別に、1号住居跡・2号住居跡・3号住居跡・4号住居跡・6号住居跡・7号住居跡・8号住居跡・溝状遺構・ピット群出土の土器の順で報告し、最後に工事中一括の土器の紹介も含めたい。

1号住居跡出土の土器（第4図(1)～(4)）

この遺構からは口縁部2点、底部1点、环形土器1点の出土があった。

(1)は口径3.0cmにも及ぶ口縁部の破片である。1cm間隔に輪積み痕が2本あり口唇部へ行く程器壁が薄くなりわざかに外反している。外面に布目の横ナデが施してある。石粒を少量含み、焼成も良好である。浅黄橙色。(2)は小形の壺形土器の口縁部片で、短かく外反し口唇部へ行く程器壁が薄くなる。くびれ部付近に輪積み痕がみられる。外面には布目の横ナデが、内面には刷毛目が施されており、石粒を少量含み、焼成も良い。くびい黄橙色。口径1.2.5cm。(3)は平底の底部でわざかに突出しが見られる。底にヘラで文様らしきものがしるされており縦代底とも考えられる。なお、このヘラ目文様は中央部に向って施文されている。内外面には横ナデが見られる。胎土には砂粒が少量含まれ、焼成も良好である。くびい橙色をしている。底部径8.2cm。(4)は須恵器の环形土器である。たちあがりは内傾し、高さも低いものである。受部は水平に外方にのび、つけね部にはヘラによる1条の凹線がみられる。底部は欠いているが扁平気味のものと思われる。外面とたちあがり部の内面に横ナデがみられ、削りも半分よりも下部に施されている。胎土には砂粒を少量含み、焼成も良い。黄灰色をしている。口径は1.2.5cm、高さ約5cmである。

2号住居跡出土の土器（第4図(5)～(9)）

この遺構からは、鉢形土器1点、底部1点、环形土器2点の計4点の土器の出土があった。

(5)は鉢形土器で底部を欠く小形のものである。底部から内湾気味に立ち上がり口唇部で器壁が薄くなりながらやや外反している。口縁部につなぎ目の跡がみられ、外面ではこれを境に上部を横ナデ、中央部をヘラ磨き、底部を横ナデで仕上げている。内面は横ナデと斜ナデがみられる。また外面にはスヌの付着が確認される。胎土は小石粒を含み、焼成も良い。つなぎ目より上部が灰褐色、下部が浅黄橙色を

呈する。口径 1.8 cm、高さ約 5.5 cm。(6)は平底の底部で、木の葉底である。わずかな突出がみられる。内面にヘラきずが見られ、石粒と少量の砂粒を含む胎土で焼成も良好である。にぶい橙色をしている。

(7)、(8)はいずれも須恵器の环形土器で、短かいたちあがりが内傾するものである。(7)、(8)は同型のものと考えて良い。両方もとも、立ち上がりが内傾し、低いが(8)は(7)よりやや小形で器壁も薄手である。またたちあがりの頃も幾分かねており短かい。受け部もやや上向きに外方へのびておりつけ根部分の凹線もより明瞭である。外面の底部はヘラ削り、底部から受け部にかけてに指による横ナデが施されており、上ぐすり痕も確認された。砂粒を胎土に含み、焼成も良好で、黄灰色を呈する。口径 1.25 cm、高さ 8.5 cm。なお、底部は(7)よりわずかに尖りを見せていている。(9)は、たちあがりが少し立ち上っており受け部も水平気味に外方へのびている。外面には横ナデが施してあり、特に受け部付近では、上下にナデ痕が見られる。砂粒と小石粒を胎土に含み、焼成も良好で黄灰色を呈している。口径 1.3 cm、高さ 8.8 cm。底部は扁平気味である。なお、(7)、(8)を 1 号住居跡出土の須恵器の环形土器(4)と比べてみると、(4)はたちあがりの先端が外側に反っており、また、底部も丸味を持たずに尖り気味である点など多少異なる。

3 号住居跡出土の土器（第5図(1)～(13)）

この遺構では、壺形土器 2 点、小型の壺形土器 1 点、口縁部片 3 点、环形土器 4 点、鉢形土器 1 点、脚部 1 点、柱状の土器 1 点の紹介をしたい。

(1)は底部を欠くが壺形土器である。最大径を胴部中央よりやや上部につつも卵形の胴部で肩も張っている。くびれた頸部からわずかに外反する口縁がのびている。肩部から胴部にかけて 1.5 cm 間隔で 11 本の輪積痕が外面に見られる。器面調整は外面の口縁部に横ナデ、胴部に斜めナデ、下部に上下のナデ、内面には横ナデが施されている。また、胴部外面の中程と内面下部にヘラによる整形跡が見られる。また外面にはススの付着も確認される。砂粒と小石粒を含み、焼成も良好である。浅黄橙色。口径 2.08 cm、胴部最大径 2.62 cm、高さは約 2.6 cm。(2)は木の葉底の完形の壺形土器である。平底の底部に、最大径を胴部中央部よりやや下部にもち、肩の張らない卵形の器体がつく。口縁部はくびれの小さな頸部から短か目氣味にやや外反する。胴部の外面には 6 本の輪積み痕がみられ、ヘラでナデで整形が行われている部分もある。また、胴部の内外面とは口縁部に横ナデが施されている。石粒を胎土に含み、焼成も良いが荒い作りである。最大径 2.02 cm、口径 1.48 cm、高さ 2.23 cm。(4)は輪積み痕のみられる口縁部の土器片である。炉の内部から出土したものである。開き気味の口縁部の上端が器壁を薄くしながらわずかに外側に反る。輪積み痕は、くびれ部に一本、あとは胴部に 1.5 ～ 2 cm 間隔で 3 本みられる。口縁部に横ナデ、下部に上下のナデが、また外側にはヘラ痕やくぼみが所々にみられる。砂粒や小石粒を胎土に含み焼成も良好で、にぶい黄橙色をしている。口径約 2.2 cm である。(7)も口縁部の小片で、器形はよくわからないが、表面に一本の輪積み痕がみられ、そのうえから下から上へヘラ跡がみられる。(3)も口縁部の破片であるが、胴部からゆるやかに外反する口縁の外面に 2 cm 程の平坦な筋帯部がめぐらされている。その凸帯の境目に一点の列点文が施されている。この種のものは土器片ではあるが、4 号住居跡、5 号住居跡、7 号住居跡からも出土している。胴部には条痕、突帯部にはススの付着がみられる。石粒を含み焼成も良好で褐色をしている。口径 2.18 cm。(5)は小形の壺形土器である。底部を欠くが、球形の胴部に大きく外反する口縁部がつく。最大径は口縁部にある。口縁部に横ナデ、胴部の内面

に斜めナデ、外面に上下のナデが施されている。また、胴部にはスヌの付着がみられる。砂粒と小石粒を胎土に含み、焼成も良好で橙色をしている。口径 1.52cm。(6)は鉢形土器で、2号住居跡出土の土器(第1図(5))と同類と思われる。口径 1.21cm。左から右へ横ナデが見られ、砂粒、小石粒を含み焼成も良好で、褐色をしている。底部は欠く。(8)、(9)はいずれも壺形土器である。(9)は口縁部で立ち気味に内反する。左から右への横ナデが施されており、ヘラみがき痕もみられるが大部分剥離している。火を受けた跡も見られる。(8)は口縁部に一条の稜をもち外反してひらく。(9)同様、器面内外に左から右への横ナデがみられる。底部は木の葉底の平底である。両方とも砂粒を含み焼成も良好で浅黄橙色をしている。(9)は口径 1.44cm、高さ 4.5cm。(8)は口径 1.7cm、高さ 5.5cm である。(10)、(11)は須恵器の壺形土器の口縁部の破片である。(10)は先端部が外反しながら薄くなっている、器面上には上グスリが塗られている。(10)とも砂粒を胎土に含み焼成も良好で、横ナデと一部上下ナデが施されている。暗灰色をしている。時は脚部の土器片で、短かい脚ではあるが、内曲しながら裾へひろがっており、裾部端でやや内反している。表面はヘラできれいに磨かれており、上から下へヘラあとがみられる。砂粒、小石粒を胎土に含み焼成も良好である。裾部の径は 7.6cm。また、底部内面の器面にもナデ痕がわずかに確認できた。(12)は高さ 6.8cm、径 4.2cm の柱状の土器である。たてに 1 本接着痕がみられ、底部にヘラきずも見られる。胎土に砂粒と石粒を含み焼成も良好でにぶい褐色をしている。使用目的は不明である。

4号住居跡出土の土器(第1～6図(1)～(12))

この遺構では、完形の変形土器 1 点、口縁部片 5 点、底部 2 点、壺形土器 4 点の出土土器の紹介をする。

(1)は、完形の変形土器である。突出した木の葉底の底部に球状の胴部がつく。くびれのほとんどない頸部からゆるやかに外反する短かい口縁が開く。口唇部は丸味をもつ。肩部の内面に 3 本の輪積み痕がみられ、内面には横ナデが、また外面には口縁部に横ナデ、胴部から底部にかけて下から上へのヘラナデと指痕が施されている。胴部にはスヌの付着がみられる。砂粒と石粒を胎土に含み焼成も良好である。色調は口縁部から胴部にかけては浅黄橙色、底部はにぶい橙色を呈している。最大径は胴部中央よりやや下にあり 1.76cm、口径は 1.62cm、高さは 1.54cm。(2)、(3)、(4)、(5)、(6)はいずれも口縁部の土器片である。(2)、(3)は口縁がわずかに外反し、頸部にしまりがなく、胴部もあまり膨らない。また、輪積み痕が(2)では頸部と肩部に 2 本、(3)には口縁部と頸部に 2 本みられ、横ナデによる調整も施されている。(2)は砂粒と石粒を含み、口径は 2.03cm。(3)は口唇部に丸味をもつ。口径 2.34cm。両方とも橙色で焼成も良い。(4)も頸部にしまりはないが、口縁部は大きく外反する。外面に横ナデ、内面に横ナデと斜めナデが施してある。小石粒を含み焼成も良好でにぶい橙色をしている。口径 2.04cm。(5)は 8 号住居跡でもみられる列点文をもつ縄文土器の口縁部の破片である。列点文が施してある部分まで大きく外傾しており、一段の稜を焼け口唇部がやや立ち気味にひらく。列点文は稜の下に 3 個が 2mm の間隔で施してある。なお、この列点文は完通してはおらず、その分、内面に突出部がみられる。また内面には左から右へのヘラ刻みが施してある。砂粒と少量の石粒を含み、焼成も良好で橙色をしている。口径 1.62cm、列点文の巾 6mm である。(6)も大きく外反する口縁部の破片である。(7)、(8)はそれぞれ底部で(7)は丸味をもった平底の底部で、内面にナデ痕がみられる。石粒を胎土に含み焼成も良好である。(8)はあがり底で

外面には指痕がみられる。砂粒を含み焼成も良好である。(9), (10), (11), (12), (13)は壺形土器で、(9), (10), (11)は須恵器、(12)は土師器である。(10)は土師質の壺形土器で、たちあがりが内傾し受け部が水平に外方へのびる器形をしている。(12)同様、須恵器の壺形土器の模倣品と思われるが、本遺跡出土の須恵器の壺形土器と比べると、たちあがりもやや立ち気味で長目である。受け部は短かく、時期的に一段階前の形式と考えられる。底部は丸味をもつ木の葉底で、器面には外面と内面口縁部に横ナデ、内面胴部から底部にかけてヘラナデが施され、また外面にはヘラ痕もみられる。口径 1.8 cm, 高さ 5 cm, たちあがり部の高さ 1.5 cm。(10)も土師質の壺形土器で(10)同様、たちあがり部が長目で、受け部とのつけ根につなぎ目痕がみられる。口径 1.8 cm, 高さ 4.1 cm, たちあがり部の高さ 1.5 cm。両方とも砂粒を胎土に含み焼成も良好で橙色をしている。(13)は須恵器の壺形土器で、たちあがりの高さがかなり低く、器全体の器高も低い。受け部はやや上向きに外方へのびており、たちあがりと受け部の先端部は丸く整っている。受け部の付け根部分のヘラによる一条の凹線もかなり深く明瞭に施されている。胎土に砂粒を含み、焼成も良好で、灰白色をしている。口径約 1.8 cm, 底部は欠落している。(14)は、小形の壺形土器で須恵器である。口縁部で内側に折り返してあり、口唇部の内面を約 45 度の傾斜で整形してある。横ナデとヘラ削りが施され、一部分欠損痕もみられる。砂粒と少量の石粒を胎土に含む。焼成は良好で灰、オリーブ色をしている。口径 3.4 cm, 高さ 4.1 cm。(15)は受け部をもたない須恵器の壺形土器である。底部は欠くが、口縁部は外傾度が大きい。内面にくぼみがみられ、横ナデによる調整が施されている。灰色をしている。

6 号住居跡出土の土器（第 16 図 (14)～(16)）

この遺構からは、小鉢形土器 1 点と大鉢形土器 1 点、底部 1 点の出土があった。

(16)は、底部を欠くが小鉢形の土器である。頸部から急に内溝し口唇部でわずかに外反する。最大径を頸部にもつ。内外面とも横ナデが施されている。石粒をほんの僅か胎土に含み焼成もきわめて良好であり赤色をしている。口径は 1.1 cm, 最大径は 1.2 cm である。(17)は口径 3.8 cm にも及ぶ大形の鉢形土器である。底部を欠くが、ゆるやかにひらきながら立ちあがっていく。全面にヘラによる横ナデがみられる。ススも付着している。中央部から口縁部にかけて黒褐色、下部はにぶい黄橙色をしている。砂粒を少量胎土に含み焼成も良好である。(18)は突出部をもつ木の葉底の平底の底部で、内面にヘラ痕、外面上に指によるくぼみがみられる。砂粒を少量と石粒を含み焼成も良好である。

7 号住居跡出土の土器（第 17 図 (1)～(5)）

この遺構からは、小形の壺形土器 1 点と口縁部 2 点、底部 2 点の出土があった。

(1)は底部を欠くが、小形の壺形土器である。球形の胴部に、くびれた頸部からまっすぐに外傾する長目の口縁部をもつ。口縁部が最大径で、口唇部は水平に整えられており器壁は薄手である。全面にヘラナデが施してあり、砂粒を少量胎土に含み、焼成も良好である。明黄褐色をしている。口径は 1.8 cm である。(2), (3)は口縁部の破片であるが、(2)は外反する口縁部。(3)は外傾する口縁部で列点文を有する網文式の土器片である。約 2.5 cm 間隔に 4 mm 程の列点文が 2 点施してある。内面には列点文の施文による盛り上がりがみられる。調整は横ナデによるもので、胎土には小石粒を含み焼成も良好で浅黄褐色と

黒色のまだら文様を呈している。3号住居跡、4号住居跡出土の列点文を有する土器と同類のものである。

(4)、(5)は底部である。(4)は突出した底部であるが、非常に丸味をもたせてある。全面に横ナデが施してあり、底部の内面にはヘラで刻み穴がみられる。また外面には粘土片が付着しており底にヘラ傷もみられる。胴部には指紋痕もある。石粒を含み焼成も良好で、にぶい黄橙色をしている。(5)はあがり底気味の底部で、胴部との間につなぎ目痕がみられる。つなぎ目部付近に指紋痕がみられ指による整形が施されている。底にも指紋痕がみられる。胴部には横ナデが、また、つなぎ目部にはヘラによる刻み痕もみられる。

8号住居跡出土の土器（第17図(6)～(8)）

この遺構からは3点の环形土器を出土している。

(6)は、須恵器の环形土器である。たちあがりが内傾し、割と短かい。受け部もやや上向きに外方へのびている。2号住居跡出土の环形土器（第1図(7)・(8)）と同系であろう。底部を欠くが、口唇部と受け部は丸く仕上げてあり、調整には横ナデが施されている。砂粒を胎土に含み焼成も良好である。灰色。口径1.2cm。(7)は受け部を持たない須恵器の环形土器である。底部を欠くが、割と深く、底部は厚手である。口縁部はほぼ垂直に立ちあがり、口唇部は丸味を帯びている。全面に横ナデが施してあり、外面の底部付近にヘラ削りがみられる。砂粒を少量と小石粒を胎土に含み焼成も良好である。灰色。口径は1.4.8cm。(8)は土師質の环形土器で、これも底部を欠く。口縁部へ行く程器壁が薄くなり口唇部でやや外反する。横ナデが施されており、胴部外面には指紋痕がみられる。石粒を少量胎土に含み、焼成も良好である。浅黄橙色。口径は1.1.8cmである。

溝状遺構出土の土器（第17図(9)～(14)）

(9)は、須恵器の环形土器で、受け部は持たない。底部を欠くが下へ行く程、器壁が厚くなる。口縁部は、ほぼ垂直に立ちあがり、口唇部に丸味をもつ。全面に横ナデが施してあり、砂粒を含み焼成も良好である。灰色をしている。口径は約1.3cmである。(10)は深鉢形の土器で底部を欠く。かなり急に内湾しながら開いており、口縁部は粘土によるつなぎ目痕がみられ、このつなぎ目から口唇部にかけてわずかに外反気味に広がる。口縁部内外面には横ナデが施されている。胎土には石粒を含み焼成も良好であり、にぶい褐色をしている。口径2.4.6cmである。(11)は、わずかに外反する口縁部である。(12)、(13)、(14)はいずれも底部である。(12)は木の葉底の突出した平底である。突出部外面には指による圧痕がみられる。石粒を胎土に含み焼成も良好で、灰黄褐色を呈している。底部の径は約9cmである。(13)はあがり底の底部で、胴部との境目につなぎ目痕が確認される。(14)はわずかに平底を呈している。底に少しのキズが見られる。砂粒と少量の石粒を胎土に含み、焼成も良好である。色調は浅黄橙色。

ピット群遺構出土の土器（第17図(15)～(17)）

ピット群からはわずか3点の土器片の出土しかなかった。

(15)は頸部にしまりがなく、わずかに外反する口縁部片である。横ナデによる調整がみられ、砂、小石

粒を胎土に含み焼成も良好で、橙色と浅黄橙色がまだ見られる。鉢は口唇部へいく程、薄手になりつつ外反する口縁部片である。胎土に砂粒、小石粒を含み焼成も良好であり浅黄橙色をしている。切は口唇部に厚味を持ってわずかに外反する口縁部片である。砂粒と小石粒を胎土に含み焼成も良好である。口縁部は黒褐色、胴部は橙色で、横ナデと斜ナデによる調整が見られ、口唇部上端に刻目が巡されている。

その他の土器（第18、19、20、21図）

今回の発掘調査以前に、中心遺構から北西約20mの地点で工事中に70点ほどの一括土器が発見され、上別府跡調査のきっかけとなった。口縁部、底部の出土がほとんどで、高环形土器などもみられる。

口縁部の土器には、外反する変形土器などの口縁部（第18図）と、二重口縁の変形土器の口縁部（第19図）とに分けられる。(1)～(5)は頸部にしまりを持つ口縁部である。(1)は頸部がしまり、胴部はあまり膨らない。口縁部は外反する。口縁部に横ナデ、頸部から肩へかけて上から下へのナデ痕が施してあり、頸部にはヘラ削り痕もみられる。砂粒を胎土に含み焼成も良好である。にぶい橙色をしている。口径が最大径で20.6cmある。(2)は頸部につなぎ目を持ち縮まっている。胴部は膨らない。口縁部は大きく外反する。全面に横ナデがみられ、石粒を胎土に含み焼成も良好で橙色をしている。口径は25.8cm。(4)も、幾分か縮った頸部から垂直気味に口縁部が立ちあがり口唇部で外反する。頸部のたちあがり部の外面に指による斜のナデがみられる。また、口縁部外面には横ナデ、胴部内面には斜めナデ、頸部から口縁部の内面には横ナデの上から斜めナデが施されている。胎土に少量の砂粒を含み焼成も良好である。口径は25.3cm。(5)は、他の4つと比べると、頸部の縮まりはわずかだが、一応縮まりを見せて胴部はあまり膨らない。口縁部は割と開いて外反する。横ナデがみられ、砂粒を少量胎土に含み、焼成も良好でにぶい橙色を呈している。口径は23.5cmが最大径は胴部にある。(6)～(8)はしまりのない頸部からわずかに外反する口縁部片である。(7)は縮まりのない頸部からゆるやかに開き気味に外反する口縁部で横ナデが施されていて、砂粒を少量含む。にぶい橙色をしている。口径24.6cmで最大部である。(9)も同類の形で、ゆるやかに外反する口縁部である。全面に横ナデがみられ、砂粒と少量の石粒を含み、焼成も良好である。にぶい橙色をしている。口径29.8cmである。(6)は、頸部にほとんど縮まりがなく口縁部もわずかに外反し、胴部は膨らない。2本の輪積み痕がみられ、横ナデによる調整が施してある。胎土には小粒を少量含み、焼成も良好でにぶい黄橙色をしている。口径23.4cmである。(8)も(6)と同じ傾きの口縁部片で、口唇部が薄く尖っている。(8)も頸部のしまりは全くなく、口縁部もわずかに外反する。外面を横ナデの上から斜めナデで、内面は横ナデで調整が行なわれている。砂粒と小石粒を胎土に含み焼成も良好で、にぶい橙色をしている。口径26.8cmである。(10)～(12)は外反する口縁部の土器片で頸部は含まない。(10)、(11)、(12)はかなりひらき気味に大きく外反する口縁部で、いざれも横ナデが施してあり砂粒、石粒を胎土に含む。焼成も良好である。(10)は口径19.4cm、明赤褐色。口唇部は丸味を持ってわずかに反っている。(11)も口唇部は(10)同様に反る。口径は16.6cm、浅黄橙色。(12)は口径22.6cmでにぶい黄橙色をしており、口唇部は先端がわずかに薄くなる。(12)は、あまりひらき気味ではないが、口縁部が外反し、口唇部でさらに反る。先端は丸味をもつ。内面に右から左への横ナデが、外

面にも横ナデが施されており、黄橙色をしている。口縁径15.7cmである。母はかなり湾曲しながら外反する口縁部で口唇部は薄くなる。横ナデによる調整がみられ、砂粒を胎土に含み焼成も良好でにぶい黄橙色をしている。母も同様、大きくひらき気味に外反する口縁部片である。母も大きく外反する口縁部端の破片だが、器壁は厚手で口唇部はつなぎ目痕がみられ、先端に2本の沈線を巡らせている。砂粒を含み焼成も良好である。器面には横ナデが施してある。母、母は胴部が内湾しながら立ちあがり、頸部で大きく外反して開き、口唇部で器壁が薄くなる器形の土器である。母は内面に上から下のナデ、外面には上から下のヘラナデと左から右への横ナデが施してある。にぶい黄橙色をしている。口縁径は約20cmで最大部である。母は外面にヘラ刻みがみられ、灰褐色で口縁径が最大で21.6cmである。なお両方とも、砂粒と少量の石粒を含み焼成も良好な土器である。母～母は頸部から外傾する口縁部で他の口縁部と比べると反り気味ではない。また、口唇部に上端で器壁が薄くなる。母は他の8点と比べると外傾度が緩やかで内外面に横ナデが施してあり、胎土に砂粒と少量の石粒を含み焼成も良好でにぶい黄橙色をしている。母～母はいずれも胎土に砂粒と石粒を含み焼成も良好で色調は橙色をしている。内外面には横ナデが施してある。4点とも小型の土器の口縁部である。母は8号、4号の住居跡の堆土からも出土した列点文をもつ縄文式土器の口縁部片である。かなりの厚手の土器で口唇部先端は水平に整っている。列点文は5mm程の大きさで完通はせず、内面に盛り上がりをみせる。また、列点文のすぐ上部に小さな突帯がみられる。胎土には砂粒と石粒を含み、焼成も良好である。色調は淡黄色をしており、横ナデが全面に施してある。

第19図(1)～(3)は二重口縁部をもつ壺形土器の口縁部である。この土器はいわゆる安国寺式土器との関係が考えられるが、先の延岡市野田町八田遺跡で出土をみた二重口縁土器同様、口縁部上半分が外傾しており、また、横描き波状文は描かれておらず、頸部に突帯をもちヘラで深く刻み目が刻んであるのが本遺跡出土の二重口縁部の土器の特徴と言えよう。

(1)は、他の二重口縁部を比べると、頸部が細く、くびれも大きい。口縁部上半分もラッパ状に広く外反する。頸部に突帯をめぐらせヘラによる刻み目がみられる。また、口縁部中程に縫ぎ目がみられる。器面は横ナデと斜めナデによる調整が施されている。胎土は砂粒を少量含み焼成も良好で橙色をしている。口径17.8cmである。(2)も、口縁部上半分のみの土器片であるが、縫ぎ目をもちかなり広く外反する。横ナデが施してあり、砂粒と少量の石粒を含む。焼成も良好でにぶい褐色をしている。(3)～(5)は、口縁部上半分がさほど広がらずに外反する口縁部で縫ぎ目がみられる。(3)は頸部までの土器片で、頸部に貼り付けではないが突帯気味に盛りあがりをみせヘラによる刻み目をめぐらせている。刻み目はそれ程深くはない。全面に横ナデを施し、砂粒を含み焼成も良好でにぶい褐色を呈している。口径は17.8cmで、頸部のくびれは(1)程はない。(4)、(5)は頸部を欠く口縁部に上半分の土器片である。いずれも縫ぎ目がみられ、くの字に外反する二重口縁部である。(4)は縫ぎ目部付近の外面に小さなくぼみがみられる。横ナデ調整がみられ、砂粒を少量含み焼成も良好で橙色をしている。口径は16cm。(5)もくの字に外反する二重口縁部ではあるが、ややひらき気味に反っており口唇部は器壁が薄くなる。横ナデがみられ砂粒を含み焼成も良好である。淡橙色で、口径18.3cmである。(6)、(7)は口縁部上半分を欠く頸部のみの土器片であるが、縫ぎ目からの傾きから二重口縁と思われる。また、いずれも頸部に突帯をめぐらせヘラによる刻み目が施してある。(6)の突帯部の刻み目は上から下への刻みである。全面に横ナデが施してあ

り、胎土には砂粒を少量含み、焼成も良好で橙色をしている。(7)はにぶい赤褐色をしている。(8)、(9)は口縁部のみの土器片であるが、下部の模様具合からみて二重口縁部の上半分と思われる。ゆるやかに外反し、砂粒と石粒を少量含み、焼成も良好である。(8)は斜めナデが施してあり、ススの付着もみられる。口径は14.2cm。黒褐色を呈している。(9)は、横ナデによる調整がみられ、口径は17.8cm。にぶい橙色である。(10)～(13)は頸部の土器片で口縁部上半分の折り返しは欠いているが、頸部に貼り付け突帯をめぐらしている。なお頸部から口縁部下半分にかけて3本の縦ぎ目痕がみられ、刻み目も深い。全面に横ナデが施してあり、砂粒、石粒少量を含み焼成も良好である。橙色。(10)も頸部が細い。(12)は頸部のくびれはそれ程はない。いずれも横ナデが内外面にみられ、砂粒を少し含み焼成も良好である。色調は橙色。なお時は二重口縁の土器ではないが、頸部に貼り付け突帯をめぐらせ、ヘラによる刻み目を施している。口縁は大きくラッパ状にひらき、口唇部上端で器壁が薄くなっている。同じ刻み目をもつ土器として合わせて紹介した。

底部(第20図(1)～(8))には、丸底のもの((1)～(3))と平底のもの((4)～(6))、突出のみられるもの((7)～(9))の8種類のものがみられる。(1)は丸底の底部で、かなりのふくらみを持って立ちあがる。内面に布目による調整が施してあり、外面と底にはヘラ跡も見られる。焼成は良好でにぶい橙色である。(2)も丸底で、急激に立ちあがりをみせる。外面にヘラ磨きの跡がみられる。胴部はにぶい橙色で、底部は褐色である。(3)も、ふくらみながら胴部へ続く丸底の底部である。平底の底部では、底部から丸味を持ちながら胴部へつながるもの((4)～(7))と、底部からまっすぐに外傾気味にたちあがるもの((8)～(9))と、底部から胴部へかけての部分で、くぼみを持ってひろがっていくもの((10)～(13))とがある。(4)は外面の底周間に放射模様のヘラナデがみられ、外面にも上から下へのヘラナデが施してある。橙色。(5)は丸味をもって底部につながる。内面にヘラ跡。外面にヘラナデがみられる。にぶい橙色をしている。(6)は内面に調整痕がみられ、外面にはヘラナデ、底の部分にはヘラ傷の痕もみられる。浅黄橙色をしている。(9)は内面にナデ痕がみられ、外面と底の部分にヘラキズ痕がみられる。砂粒を含み浅黄橙色をしている。(10)は櫛ナデが内外面に施してある。(11)は底の内面に放射模様が施してある。いずれも橙色をしている。(12)は内外面に斜めナデ、底部にキズ痕がみられる。にぶい橙色。(13)は外面に布の上から手でなでてある跡がみられる。焼成はやや劣るようだ。時はにぶい橙色で、砂粒を少量含み、上から下への斜めナデが見られる。(14)、(15)、(16)は、いずれも突出気味の底部で胴部との境目にくぼみをもつ。(14)は内外面に上から下へのヘラナデ。底にヘラキズの跡がみられる。橙色をしている。胴部は丸味をもつ。時は外面に細かい櫛目痕が施してあるが底部周囲でとめてある。なお、底部は手でおさえてある。時は外面の底部に指痕がみられる。(17)～(18)は突出しを持つ底部である。時の突出部は小さいうえに、あがり底気味のくぼみがみられる。内面には軽いヘラ痕。外面にはヘラナデが見られる。浅黄橙色をしている。底部から丸味を持ちながら胴部へつなぐ。時の突出部もわずかである。胴部は膨っている。外面に下から上へのヘラナデが、また内面にも調整痕がみられる。にぶい橙色。時の突出部もわずかだが、やや丸味をもつ平底である。下から上にナデがみられる。表面に砂粒が多く橙色をしている。時は突出部をもつ平底の底部と言えよう。かなり厚手の底部であるが、底にヘラ痕がみられ、全面には布の上から手でなでた痕跡がみられる。砂粒と石粒を少量含み、焼成は少し劣る。にぶい黄橙色をしている。

第21図(1)～(4)は、肩部の土器片である。(1)は、珠形で胴のかなり膨った胴部に短かい頭部がほぼ垂

直に立ちあがり気味に外反する土器である。頸部に横ナデで、肩から胴部にかけて上下のナデによる調整がみられる。また、頸部と肩部の内面のつけ根に指痕がみられる。砂粒と小石粒を含み、焼成も良好である。大形の短頭甕。(2)は珠形の胴部から、やや垂直気味に立ちあがる口縁部がびる。頸部につなぎ目がみられ、外面は指で整形した痕跡がみられる。内面は頸部を横ナデ、胴部を上から下への斜めナデによって調整している。砂粒を含み焼成も良好である。色調は灰白色である。胴部に最大径をもち16.2cmである。(3)は、あまり頸の膨らない胴部に頸部にしまりがなくゆるやかに外反する口縁部がつく。頸部には斜めナデ、口縁部には横ナデが施してある。砂粒を含み焼成も良好である。胴部最大径は17.7cmだが、口縁部に最大径をもつ。口唇部と底部を欠く。(4)も、ゆるやかに外反する口縁部にしまりのない頸部と膨りのない胴部がつく。横ナデと斜めナデが施してあり、砂粒を少量含む。焼成も良好である。

高坏土器(第21図(5)・(6))も2点出土している。(5)の高坏は、脚部はわずかにふくらみを持ち、ややひろがりながら裾部へ続く。裾部は内湾気味に据びらきに開く。脚部と裾部との折れ目は鋭く折れる。脚部に上下のヘラナデ、裾部にナデアゲが施されている。橙色。裾部径は12.2cmである。(6)は脚部がかなり中ぶくらみをみせ、裾部へややひろがる。裾部は欠くが、(5)と同じと思われる。脚部から裾部へはさほど鋭くはない。脚部にヘラナデがみられる。橙色をしている。(5)より大形である。

(6)は、口径9.3cm、高さ5.4cmの長方形の壺形土器である。底部は中央部がやや尖り気味の平底で薄手である。その底部から口縁部が垂直にのびる。底に長さ6cm、深さ0.2~0.3mmのヘラ痕がみられる。内外面は横ナデがみられる。0.4mm位の石粒を少量含む。焼成も良く、明赤褐色をしている(第21図)。(7)は口径9.2cm、高さ7.6cmのコップ状土器である。平底の底部から内湾気味にひらき口縁部へつながる。口唇部は先端部に丸味をもつ。内面に横ナデが施してあり、石粒を胎土に含み焼成も良い。にぶい橙色をしている。

第21図(8)、(9)は壺形土器の口縁部である。(8)は口縁部付近でさらにひらき気味に外反する。全面に横ナデがみられ、砂粒を含み焼成も良くにぶい橙色をしている。(9)は内湾して口縁部へつなぐ。口唇部は丸味をもち、横ナデが施された砂粒と少量の石粒を含み焼成も良い。にぶい橙色を呈している。

以上で、本遺跡の住居跡遺構、溝状遺構、ピット群遺構出土の土器、および工事中の一括土器について記してきた。工事中の一括土器の中に、いわゆる安国寺武士器と類似する二重口縁の土器が出土することから、住居跡遺構等よりは古い段階の時期の遺跡の可能性も考えられる。ただ、本遺跡出土の二重口縁土器が口縁部片で完形品を伴わないこと、また、先にも述べたように、延岡市野田町八田遺跡出土と同様、口縁部上半分が安国寺式の二重口縁の特徴である内湾するものではなく、外にひらく口縁部であること、それに備目の波状紋ももたない点など、疑問も残る。また、中心遺構である住居跡遺構等からの土器の出土が少ないため遺構の時期については明確には言えない。ただ、須恵器の壺形土器が出土していることから、住居跡遺構と溝状遺構については時期も限られてこよう。そのうち、1号住居跡、2号住居跡、4号住居跡、8号住居跡からは、受け部を持つ須恵器の壺形土器が出土しており、1号、2号、8号住居跡は時期的に差ないと考えられる。また、4号住居跡からは須恵器の受け部をもつ壺形土器を真似た土師質の土器が出土しており、型式だけからみると須恵器の壺形土器と比べるとたちがあがりが長く、一段階前の時期のものと考えられる。だが、模倣品である点から、直ちに時期的な差と考え

るのは危険である。

(永友良典)

2 石 器

石器については、1号住居跡、2号住居跡、……、周辺出土と住居跡出土の順に記述することにする。

1号住居跡出土（第22図(1)）

石斧(1) 中央付近で折損した砂岩製の打製石斧である。形状は $9.8 \times 7.0 \text{ cm}$ 、厚さ 2.5 cm 、重さ 220 g である。片面は剥離面をそのまま残し、周間に刃部を形成している。研磨面は認められない。

3号住居跡出土（第22図(2)～(4)）

磨石(2) 石英斑岩製の小型磨石である。両面とも自然面を残すことなく磨られている。形状は一部欠損しているが、長径 6.7 cm 、短径 6.0 cm 、厚さ 2.5 cm 、重さは 140 g である。

磨石(3) 石英斑岩製の大型磨石である。両面とも自然面を残すことなく磨られている。中央付近より欠損しているが、形状は現状で長径 9.8 cm 、短径 8.8 cm 、厚さ 5.4 cm 、重さは 800 g である。

磨石(4) 石英斑岩製の大型磨石である。両面とも自然面を残すことなく磨られている。形状は長径 10.9 cm 、短径 10.5 cm 、厚さ 5 cm 、重さは 885 g である。

4号住居跡出土（第22図(5)～(9)）

石錘(5) 扁平な砂岩製の円錐の長軸両端に抉り込み加口を施したものである。片面が一部剥離を残している。中央部より欠損しているが、現状での形状は、長径 4.9 cm 、短径 6.0 cm 、厚さ 1.2 cm 、重さは 75 g である。

剝片石器(6) 扁平な砂岩製の剝片である。顕著な使用痕、加工痕は認められない。用途も明確ではない。

石斧(7) 頁岩製の打製石斧で刃部。身の部分もほとんど欠損している。現状での形状は、幅 4.8 cm 、厚さ 1.4 cm 、重さは 60 g である。片面は一部剥離面を残し、研磨面は認められない。

石斧(8) 刃部を折損した砂岩製の打製石斧である。現状での形状は、幅 4.8 cm 、厚さ 1.4 cm 、重さは 85 g である。片面は剥離面を一部残し、周間に刃部を形成している。研磨面は認められず、断面形状から刃部は両刃を形成するものと思われる。

石斧(9) 刃部を折損した頁岩製の有肩打製石斧である。現状での形状は、幅 4.4 cm 、厚さ 2.0 cm 、重さは 140 g である。片面は一部を除いてほとんど剥離面を残している。研磨面は認められず、断面形状から刃部は両刃を形成するものと思われる。住居内南壁そば床面から出土したものである。

5号住居跡出土（第22図(10)）（第23図(1)）

石錘（第22図(10)） 扁平な砂岩製の円錐の長軸両端に抉り込み加工が施されている。片面が一部剥

離面を残し、形状は、長径 7.3cm、短径 6.8cm、厚さ 2.4cm、重さは 1.85kg である。住居跡堆積土中から出土したものである。

剝片石器(第 23 図(1)) 扁平な砂岩製の剝片である。両面に一部剝離面を残し、長軸方向の一端に使用痕が認められる。明確な用途は不明である。

6 号住居跡出土(第 23 図(2)～(7))(第 24 図(1))

石錐(第 23 図(2)) 扁平な砂岩製の円錐の長軸両端を剝離して、抉り込み加工を施したものである。片面が一部剝離面を残している。形状は、長径 7.5cm、短径 6.2cm、厚さ 1.0cm、重さは 1.60kg である。

石斧(3) 真岩製の打製石斧で刃部を折損している。両面とも剝離面をそのまま残し、研磨面は認められない。現状での形状は、幅 6.2cm、重さは 1.70kg である。

剝片石器(4) 扁平な砂岩製の剝片である。片面に一部剝離面をそのまま残している。一部に使用痕を残しているが明確な用途は不明である。

石錐(5) 扁平な砂岩製の円錐の長軸両端に抉り込み加工を施したものである。形状は、長径 9.2cm、短径 6.5cm、厚さ 2.2cm、重さは 2.40kg である。

磨石(6) 石英製の磨石である。両面とも自然面を残すことなく磨られている。長軸両端は敲きに使用された痕跡をとどめている。形状は、長径 8.4cm、短径 6.4cm、厚さ 4.0cm、重さは 8.50kg である。

砥石(7) 砂岩製の砥石である。一面が滑らかに磨り減って、その使用度合を示している。使用痕として、磨面に 5 本の溝が確認されている。溝は幅 2～3cm、深さ 1～2cm 程度である。

石斧(第 24 図(1)) 砂岩製の打製石斧である。折損部はなく完形品で、両面に剝離面をそのまま残し、周囲に刃部を形成し、両刃をなしている。形状は 1.06×7.0cm で、厚さ 1.9cm、重さは 1.90kg である。研磨面は認められない。

7 号住居跡出土(第 24 図(2)～(5))

砥石(2) 真岩製の砥石である。一面が磨り減ってその使用度合を示している。

砥石(3) 黏板岩製の砥石の剝片である。剝離部分が多く、使用面はわずかしか残っていないが、磨滅が激しく、その使用度合を示している。

砥石(4) 黏板岩製の砥石の剝片である。磨り面は片面の一部しか残存していないが、使用面は滑らかに磨り減っている。

磨石(5) 石英底岩製の大型磨石である。両面とも自然面を残すことなく磨られている。形状は、長径 1.08cm、短径 1.05cm、厚さ 4.6cm、重さは 7.80kg である。周の一部が剝離している。

その他周辺出土(第 24 図(6)～(8))(第 25 図(1)～(16))

石斧(第 24 図(6)) 完形で砂岩製の打製石斧である。形状は 1.32×6.0cm、厚さ 1.2cm、重さは 1.30kg である。両面とも剝離面をそのまま残し、周囲に刃部を形成している。刃部は両刃をなし、研磨面は認められない。

石斧(7) 身の部分を一部残した砂岩製の打製石斧である。片面は剥離面をそのまま残している。形状は、幅4.8cm, 厚さ1.4cm, 重さは8.5gである。研磨面は認められず、断面形状から刃部は両刃をなすものと思われる。

磨石(8) 石英斑岩製の大型磨石である。両面とも自然面を残すことなく磨られている。形状は、長径11.2cm, 短径10.8cm, 厚さ5.1cm, 重さは910gである。

石斧(第25図(1)) 中央付近で折損した頁岩製の打製石斧である。片面に剥離面をそのまま残し、形状は幅5.4cm, 厚さ1.6cm, 重さは130gである。断面形状から刃部は両刃をなすものと思われる。研磨面は認められない。

石斧(2) 身の部分を残し刃部を折損した砂岩製の打製石斧である。現状での形状は、幅5.4cm, 厚さ1.4cm, 重さは80gである。両面とも剥離面をそのまま残している。刃部は断面形状から両刃をなすものと思われる。研磨面は認められない。

石斧(3) 中央付近で折損した頁岩製の打製石斧である。現状での形状は10.0×5.2cm, 厚さ2.2cm, 重さは190gである。他の石斧に比較して厚みを持つ。身の両側に剥離を多く残し、片面は剥片をそのまま残している。断面形状は凸レンズ状を呈し、刃部は両刃をなす。研磨面は認められない。

石斧(4) 中央付近より折損した砂岩製の半磨製石斧である。形状は、幅4.7cm, 厚さ1.4cm, 重さは100gである。両面とも研磨面が認められるが、粗雑である。断面形状から刃部は両刃をなすものと思われる。

石斧(5) 身の一部を残し折損した頁岩製の打製石斧である。形状は、幅3.5cm, 厚さ1.0cm, 重さは30gである。片面は剥離面をそのまま残し、研磨面は認められない。刃部は断面形状から両刃をなすものと思われる。

磨石(6) 石英斑岩製の小型磨石である。両面とも自然面を残すことなく磨られている。形状は、長径7.7cm, 短径7.5cm, 厚さ2.9cm, 重さは280gである。

石錐(7) 扁平な砂岩製の円錐の長軸両端に抉り込み加工を施したものである。形状は、長径9.0cm, 短径8.8cm, 厚さ2.2cm, 重さは230gである。片面のほぼ半分は剥離している。

石錐(8) 扁平な砂岩製の円錐の長軸両端に抉り込み加工を施したものである。片面は全面にわたり剥離している。形状は長径7.8cm, 短径6.5cm, 厚さ1.8cm, 重さは185gである。

石錐(9) 扁平な頁岩製の石錐で、変形な隅丸方形を呈し、長軸方向の両端に抉り込み加工を施している。形状は、長径6.2cm, 短径2.9cm, 厚さ0.7cm, 重さは20gと他の石錐に比べて小型で形状も異なる。中央部に縦い溝をもつものである。

磨石(10) 石英斑岩製のやや大型磨石である。両面とも自然面を残すことなく磨られている。形状は長径9.8cm, 短径9.0cm, 厚さ4.6cm, 重さは945gである。

磨石(11) 石英斑岩製の大型磨石である。両面とも自然面を残すことなく磨られている。形状は、長径11.4cm, 短径9.5cm, 厚さ5.0cm, 重さは725gで長軸円形を呈している。

磨石(12) 扁平な石英斑岩製の小型磨石である。両面とも自然面を残すことなく磨られている。一部剥離しているが、形状は、長径6.6cm, 短径6.3cm, 厚さ2.8cm, 重さは195gのほぼ円形を呈している。周囲は敲きに使用された痕跡をとどめる。

磨石03 石英斑岩製の小型磨石である。両面とも直径4.0cmの円を描く範囲に、磨り面を残存している。ほぼ円形を呈し両面とも磨り面から最大周にかけて敲きの使用痕を残す。形状は、長径6.7cm、短径6.5cm、厚さ4.9cm、重さは335gである。

磨石04 石英斑岩製の大型磨石である。両面とも自然面を残すことなく磨られている。形状は、長径10.5cm、短径10.0cm、厚さ5.0cm、重さは770gでほぼ円形を呈している。

磨石05 石英斑岩製の小型磨石である。両面とも自然面を残すことなく磨られている。周囲は敲きに用いられた痕跡を残す。形状は、長径7.5cm、短径6.8cm、厚さ4.8cm、重さは355gである。

石鍤01 扁平な砂岩製の石鍤で、長軸両端に抉り込み加工を施したものである。形状は、長径8.7cm、短径8.4、厚さ2.0cm、重さは240gで長指円形を呈している。

勾玉01 ヒスイ製の小型勾玉である。一部剝離しているが、緑色を呈し、全長1.3cm、最大幅0.5cmをしている。

(渡辺康隆)

3 第7号住居跡出土木材炭化物について

7号住居遺跡で発見された木材炭化物から、多数の試料を採集して、樹種識別を行ったところ、全試料同一樹種のコナラ (*Quercus serrata* Thunb.) であった。

住居の小屋組用木材として、広葉樹のみが使用されており、現在の一般建築資材である、スギ、ヒノキなどの針葉樹が見出されることは、宮崎県内で発見された住居遺跡の調査結果と同様である。

小屋組用材に多数のコナラ材を使用していることから、住居地は、近くに広いコナラ林が存在した比較的乾燥している台地であったであろうと想像される。

出土した木材炭化物は、完全に木炭化しており、現代の製炭技術で炭化した木炭と大差は見られない。この住居用材の炭化がどのようにしてなされたのか、例えば火災による住居の崩壊か、又は火山灰の堆積によるのか、など炭化過程の詳細については、不明である。

(大塚誠)



×30 木口面



×100 板面

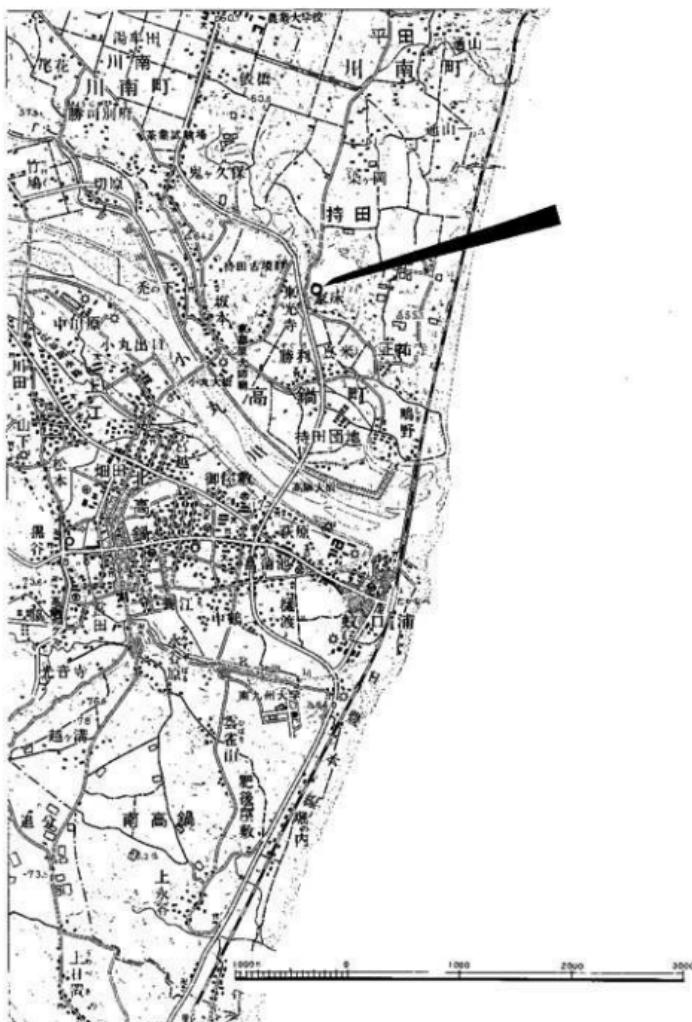
V 結 語

持田古墳群台地の一隅に存在する上別府遺跡の発掘調査は、日向中央部の海岸丘陵地帯における古代集落形成の様相を、いくらかでも解明することができるのではないかと、頭初から期待がもたれた。調査結果は9箇所の竪穴造構を発見することができた。さらに、遺跡の中央部から西側にかけては多数の柱穴群を検出することができ、その中には数個所で建物跡のプランを想定することもできた。また、遺跡の中ほどで、ほぼ南北に溝状遺構が確認され、その溝は中間の所から二段になって北の方へ延びている。そして、この溝状遺構の東側に主として住居跡が認められる。さて、竪穴造構群であるが、この中で遺構内のピットの配列などから、確かに住居跡ではないかと思われる的是最大規模である4号住居跡、1号住居跡、それに5号住居跡ぐらいである。あの竪穴造構は発見されたピットの関係から果して住居跡かどうか疑問視されるところである。特に、4号住居跡に切り込まれてつくられている3号竪穴造構からはピットが全く発見されなかった。このことから考えられることは、この3号造構は4号住居跡に付属した一種の作業場様の施設ではないかと推定されるのである。そのような見地から、他の竪穴造構を考察すると、数少ないピットが造構内で偏在しているものや、1個しかピットがないもの、いずれにしても人々が住めるような建築様式にはならないのである。放射状に炭化材が残っていた7号竪穴造構にしても、農耕作物の貯蔵か集積などのためにつくられた小屋のようなものではなかったかと考えられる。それで、その他の竪穴造構も、おそらく農耕作業に関係のある施設ではなかったかと思われる。さらにこの遺跡の西側に認められた多数の柱穴群であるが、このピットのいくつかはひとグループになった建築遺構を想定できるのであるが、この多数のピットがこの住居跡の年代のものばかりとは考えられない。ところでこのピット群の中の建築物はどのような形式のものであつただろうか。遺跡の中央で南北に走っている溝状遺構の中ほど、西側は床面が平らで全くピットが存在していない。もしかすると、この平坦な場所は農作業場であったのかもしれない。収穫物を乾燥したり、取り上げたりする場所のようでもある。この方面は多少、溝の方へ傾斜を有しているので排水がよく、直ぐ床面は乾燥したはずである。そのようなことを考慮に入れると、そのすぐ西側に存在するピットのプランから想定できる建築物は倉などが妥当なようにも思われる。そうすると平床式よりも高床式の倉の遺構と考えることもできる。つぎに、中央部を走っている溝状遺構であるが、これがいかなる理由によって設けられたものか明確にすることはできないが、一応、住居跡地区と農耕作物の貯蔵所および作業場との区分。そして、その作業などを容易ならしめるため、排水溝の役目も果していたのではないかと思われる。溝状遺構の南の部分は北側よりも多少低くなっているので、排水も可能であったように思われる。この溝状遺構については一般に弥生式遺跡から継承されて伴うものであるが、その用途については十分納得できる定説はないようである。なお、この西側に南北に一直線に細くて浅い溝が認められるが、これは、どうも後世の施設のようである。以上、竪穴造構について述べてきたが、この上別府遺跡は竪穴住居跡を主体とした遺跡であり、それに高床式の倉も存在したようである。ところで、この遺跡からの出土遺物であるが、全般的に數量が少く、土器片、須恵器片合わせて約50点ぐらい確認されただけである。それに、石器類が同様、各竪穴造構から出土している。土器類では原始的な輪積みのものも検出されており、一方、高

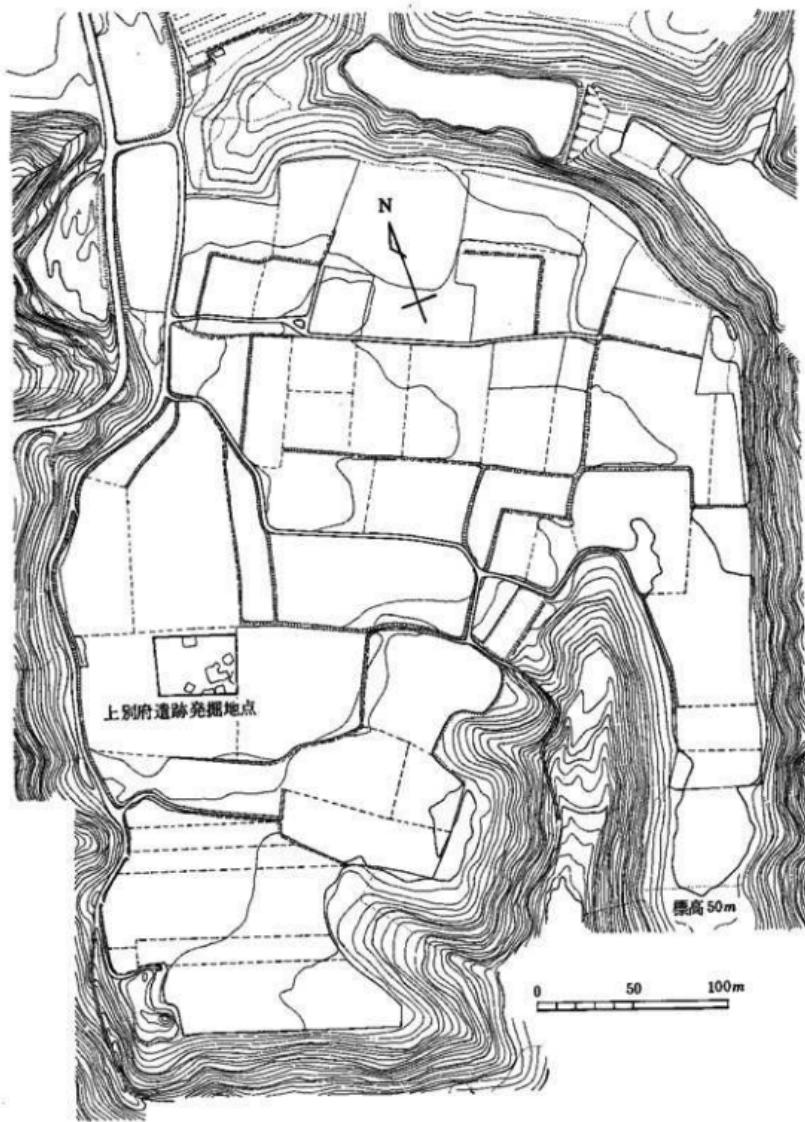
坏などは、ほとんど出土しなかった。われわれはこの遺跡から当時の貧素な生活環境を連想したのである。そして、さらに、考えさせられることは各堅穴遺跡から出土したかなりの石器類である。これらを、この遺跡に関連させて、どのように関係づけたらよいかは難しい問題である。前時代の石器類が混入しているのであれば、このように、ほとんどの堅穴遺跡の床面から出土するはずはない。やはり、この遺跡に伴うものであろう。この石器類の中でも問題視されるのは石斧類である。それからこの遺跡の年代であるが、出土した土器類の中に坏形の須恵器土器が散見されるが、その編年から考察すると第Ⅲ様式のようである。そうすると、四世紀後半頃にこの持田の台地に未だ石器類を使用したから堅穴住居生活を営んでいた人々がいたということになる。この上別府遺跡のすぐ南の方には比較的大きい円形墳が2基認められ、さらに、西の方には持田の大古墳群が点在している。また、この遺跡の台地を南に下るとすぐ前方に有名な帆立貝式の亀塚古墳がある。持田古墳群形成の終期墳を筆者は六世紀半ば頃に想定しているのであるが、そうすると、この遺跡の西方、直線で約500mの地点に存在する前方後円墳の山の上塚が築造された頃にはこの上別府遺跡には人々が居住していたことになるが、そのことは、古代文化絆創たる持田古墳の被葬者たちとは程遠い生活環境の中に生きた持田の庶民であったといえよう。

注 ①『高鍋の古墳』高鍋町文化財第四集・高鍋町教委

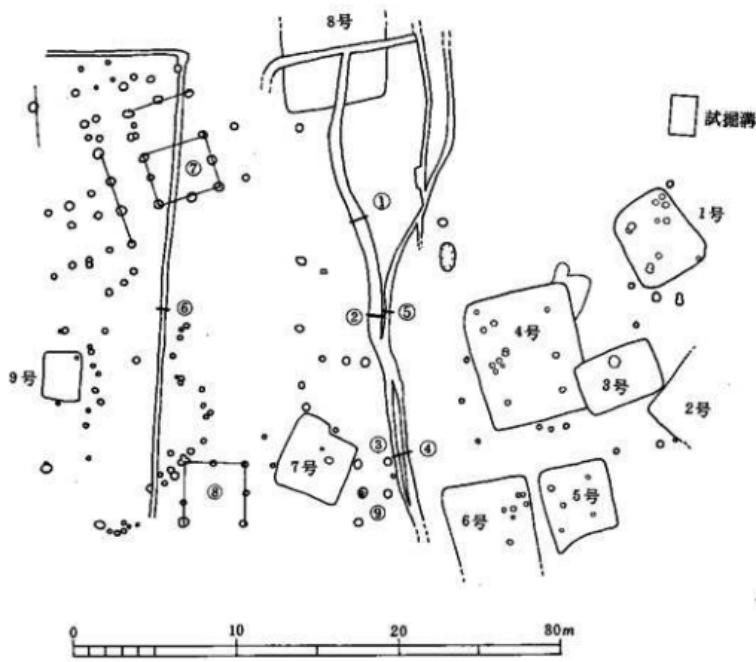
(日 高 正 晴)



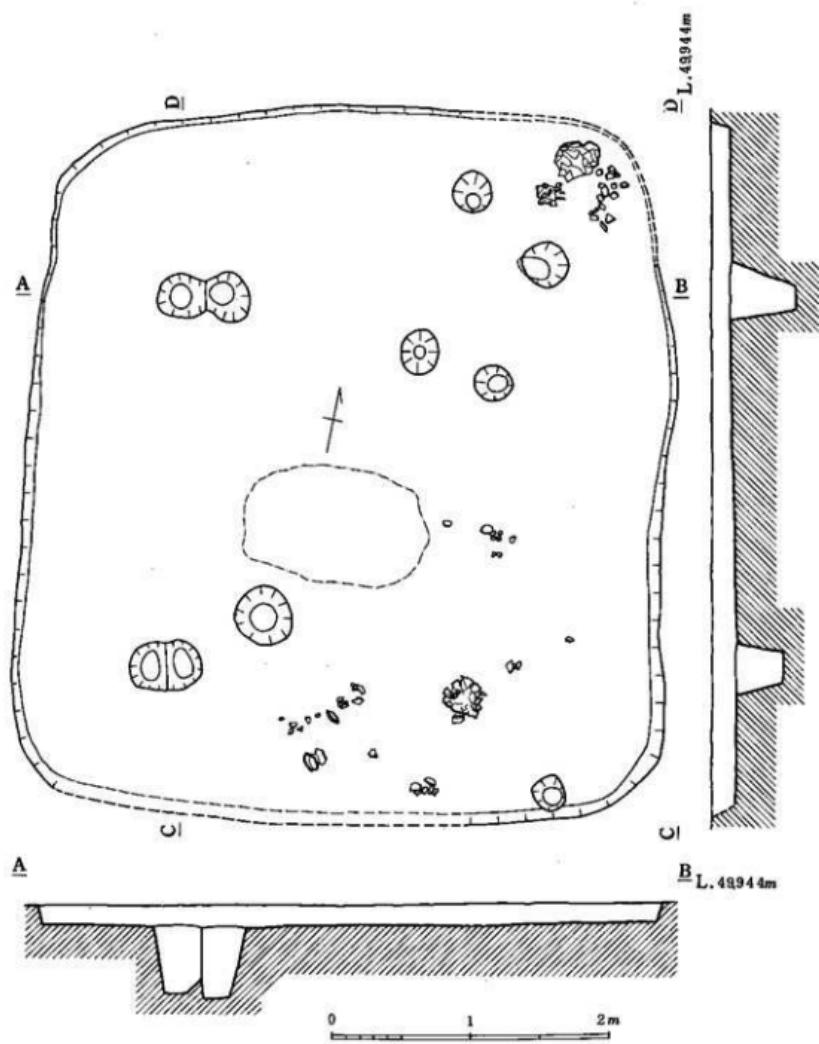
第1図 遺跡位置図



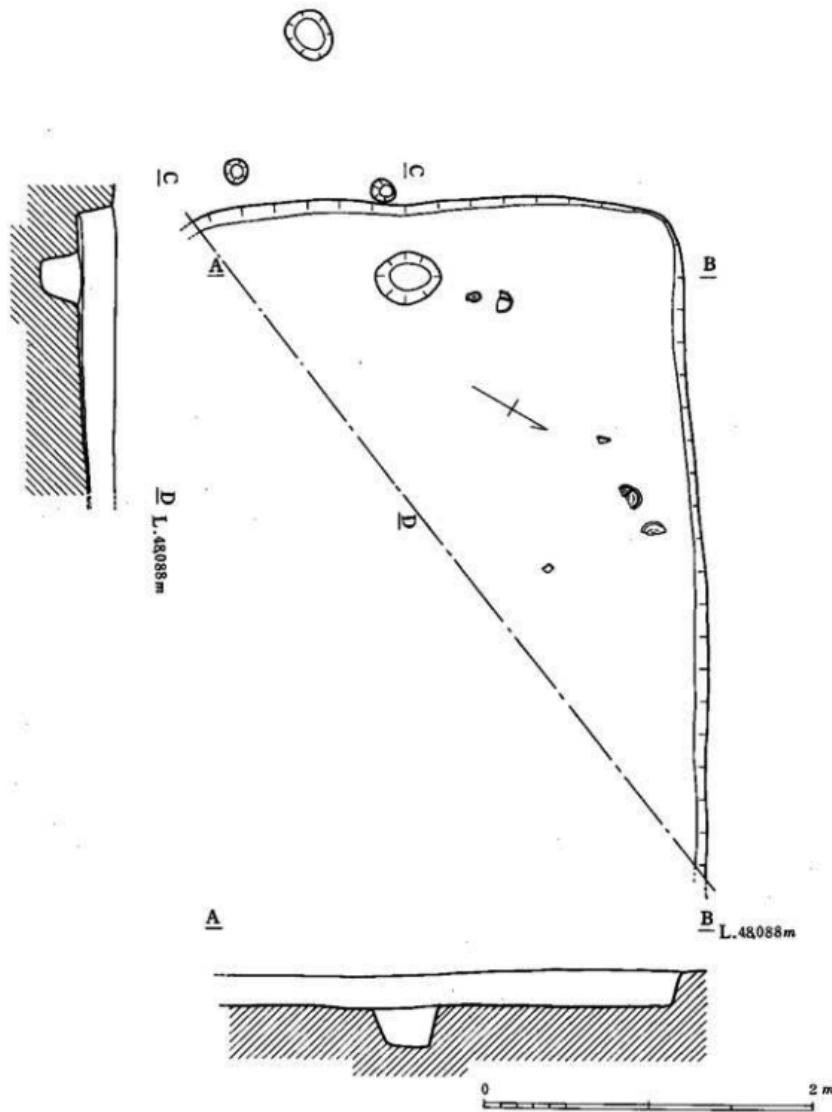
第2図 上別府遺跡地形図



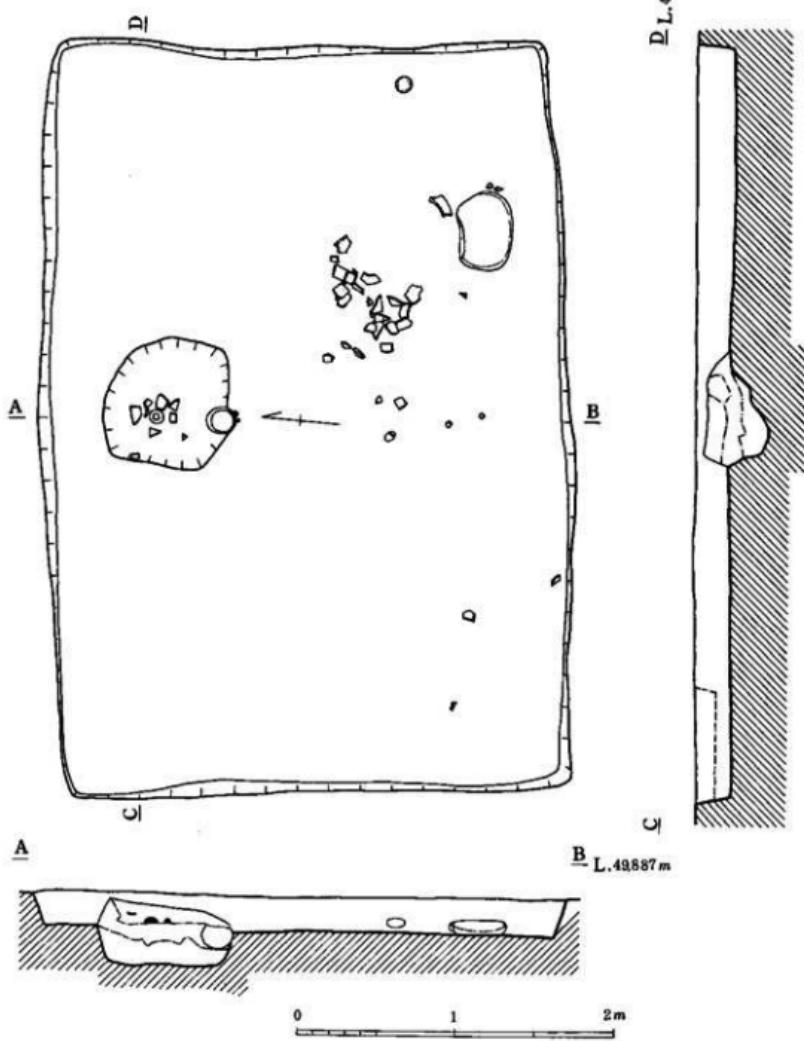
第3図 遺構配置図



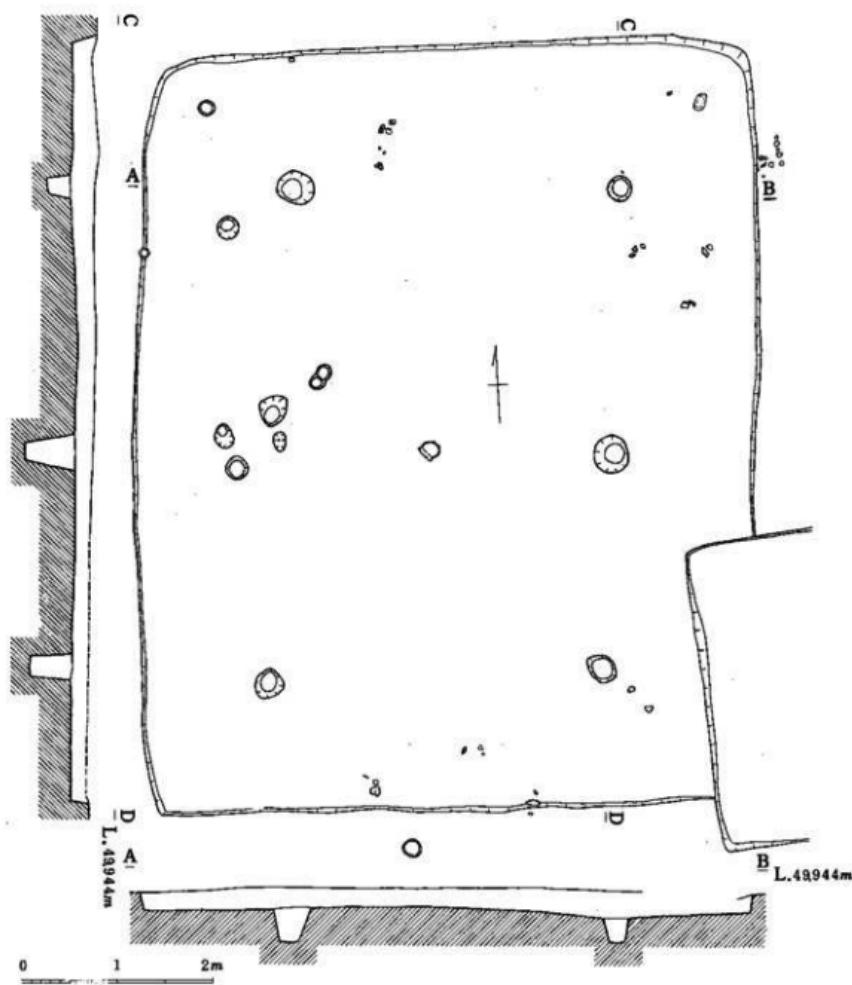
第4図 1号住居跡実測図



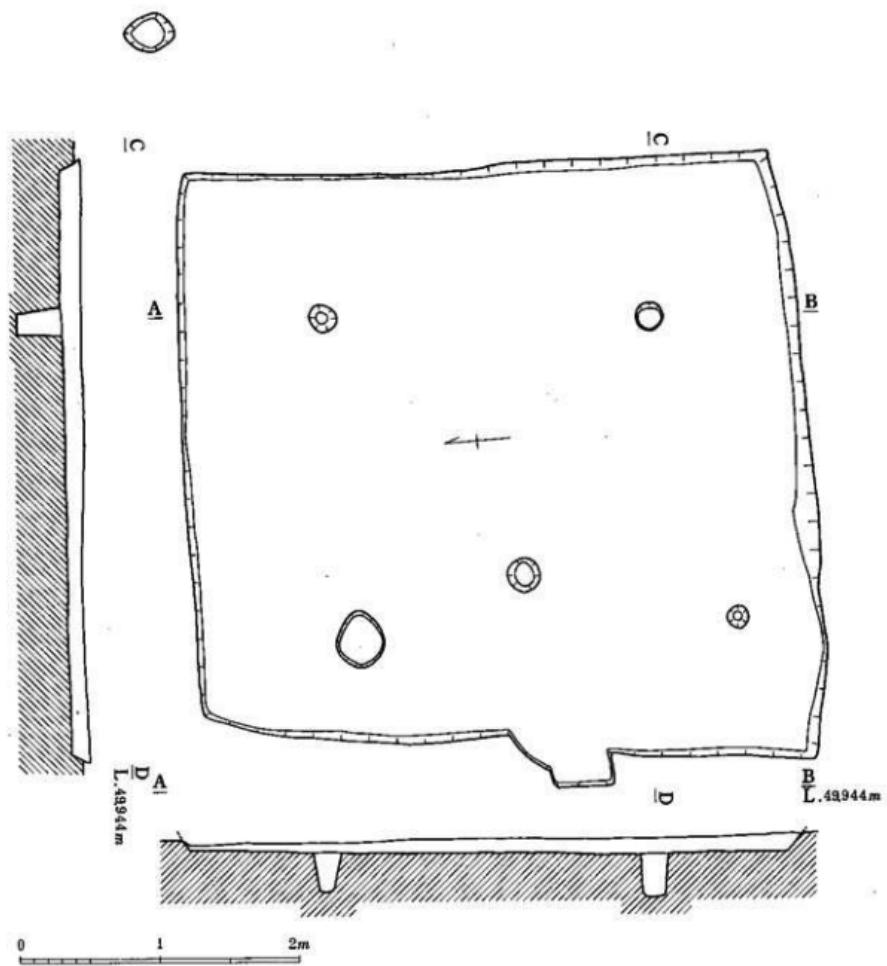
第5図 2号住居跡実測図



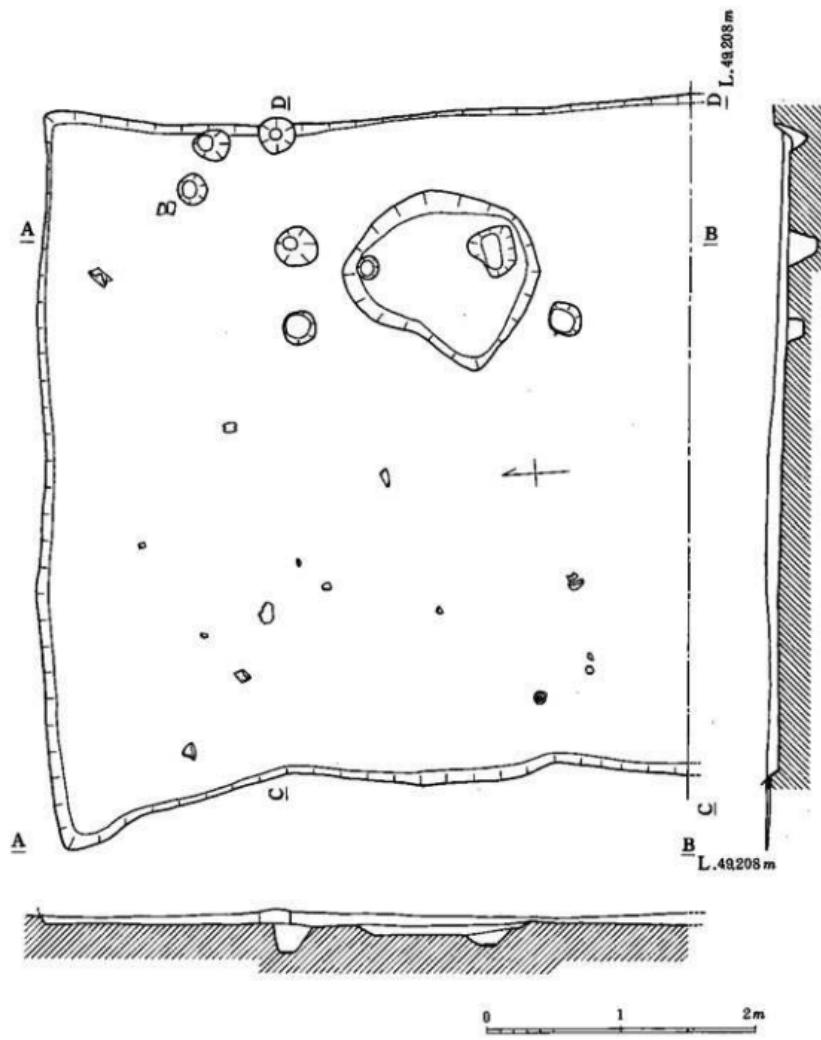
第6図 3号住居跡実測図



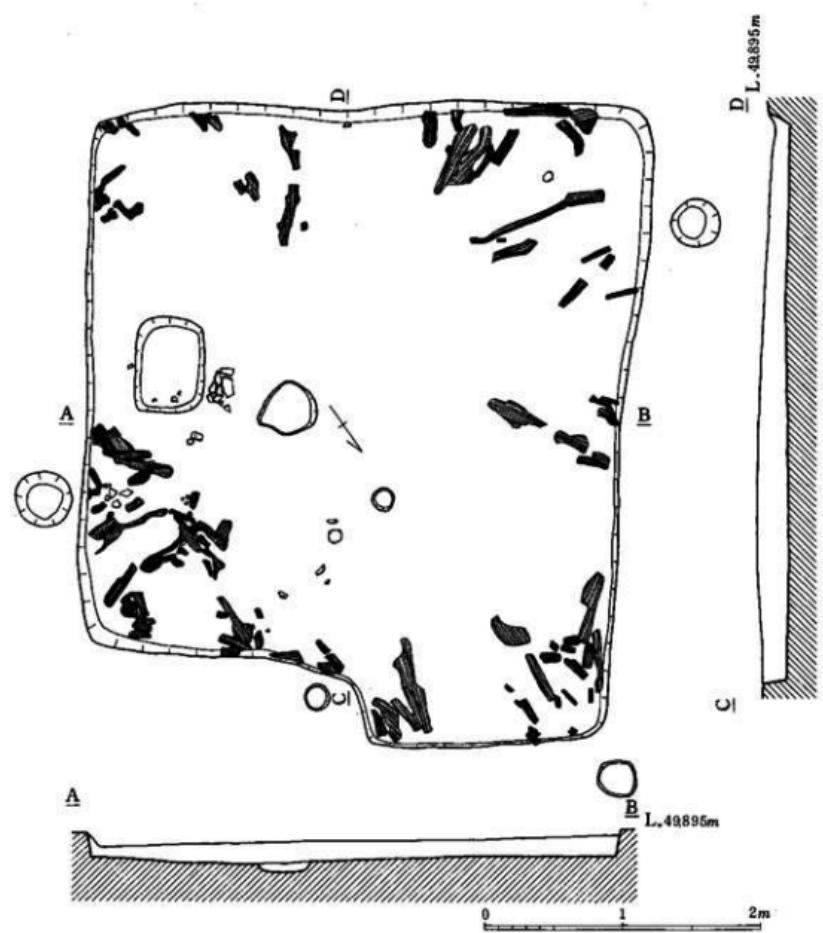
第7図 4号住居跡実測図



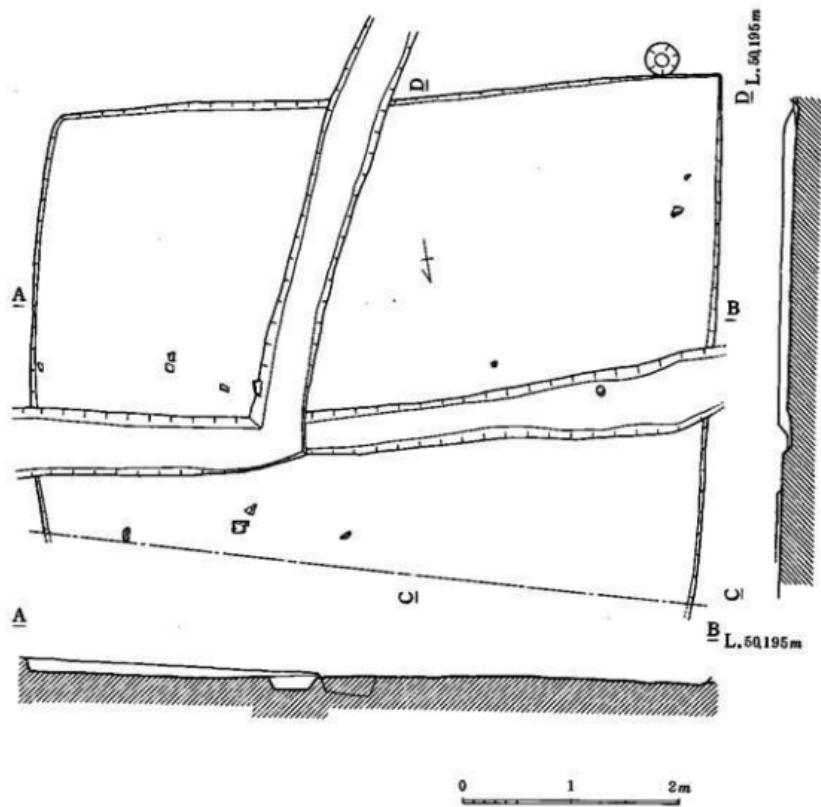
第8図 5号住居跡実測図



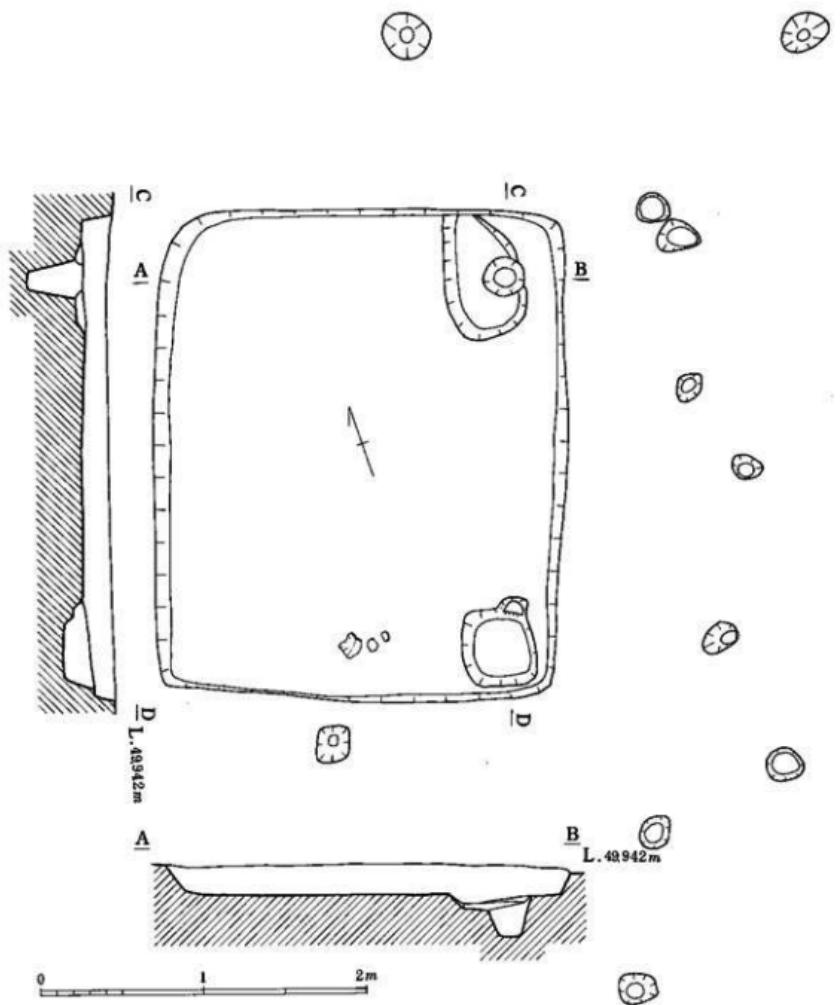
第9図 6号住居跡実測図



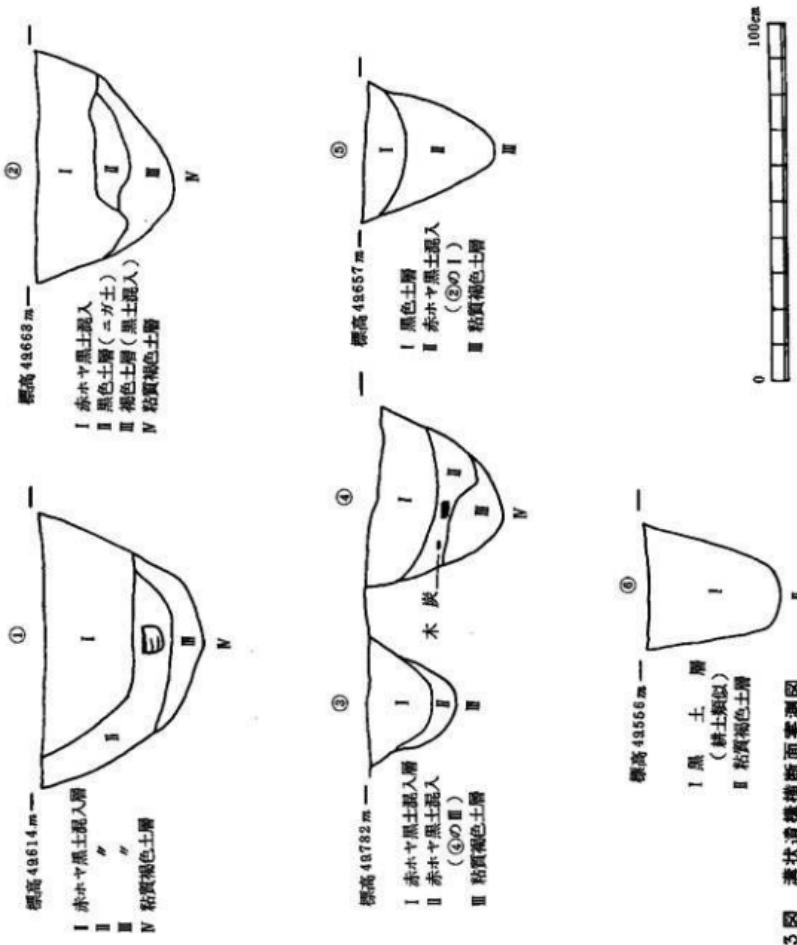
第10図 7号住居跡実測図



第11図 8号住居跡実測図

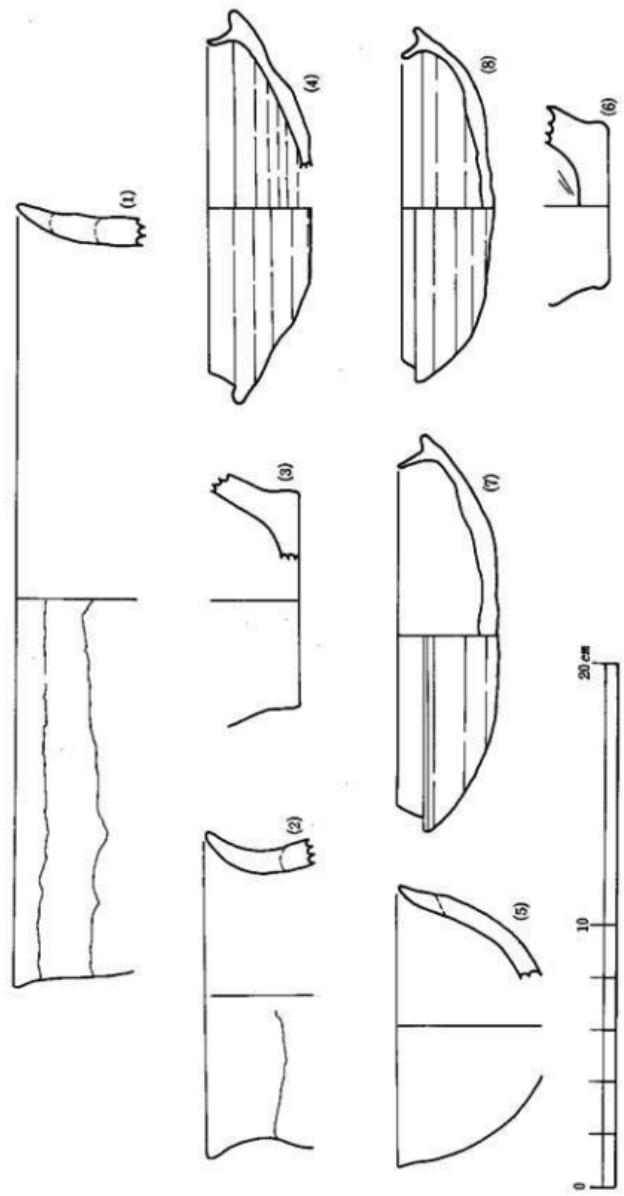


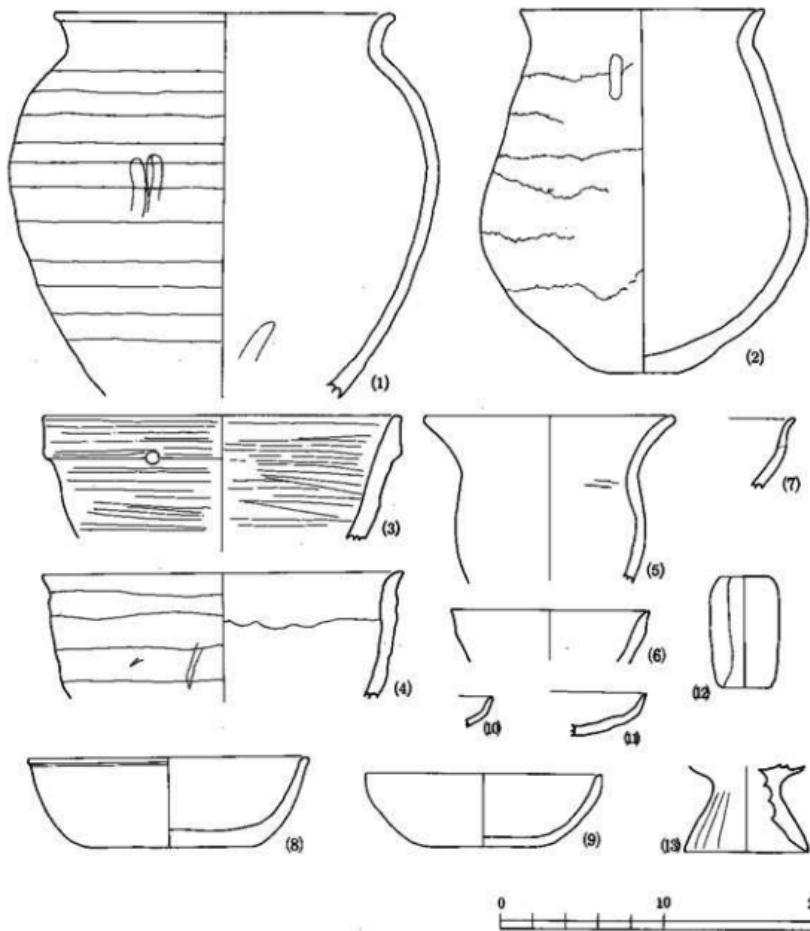
第12図 9号住居跡実測図



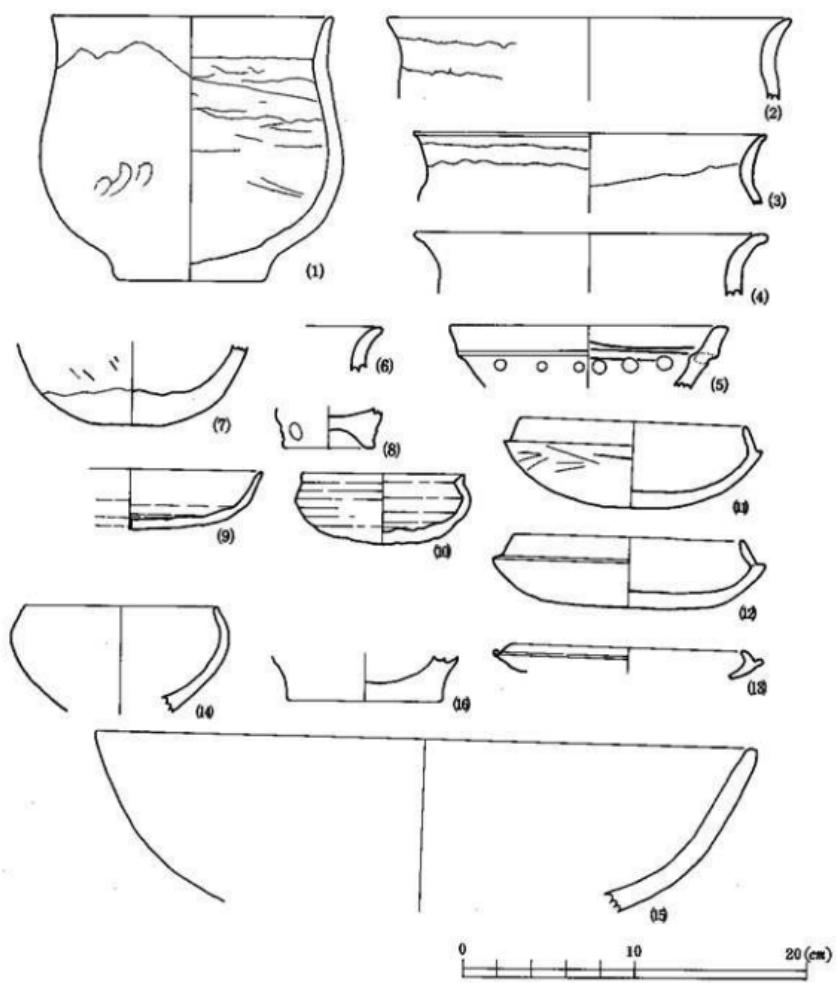
第13図 海状遺構横断面実測図

第14図 1号住居跡出土土器（1～4）2号住居跡出土土器（5～8）素描図

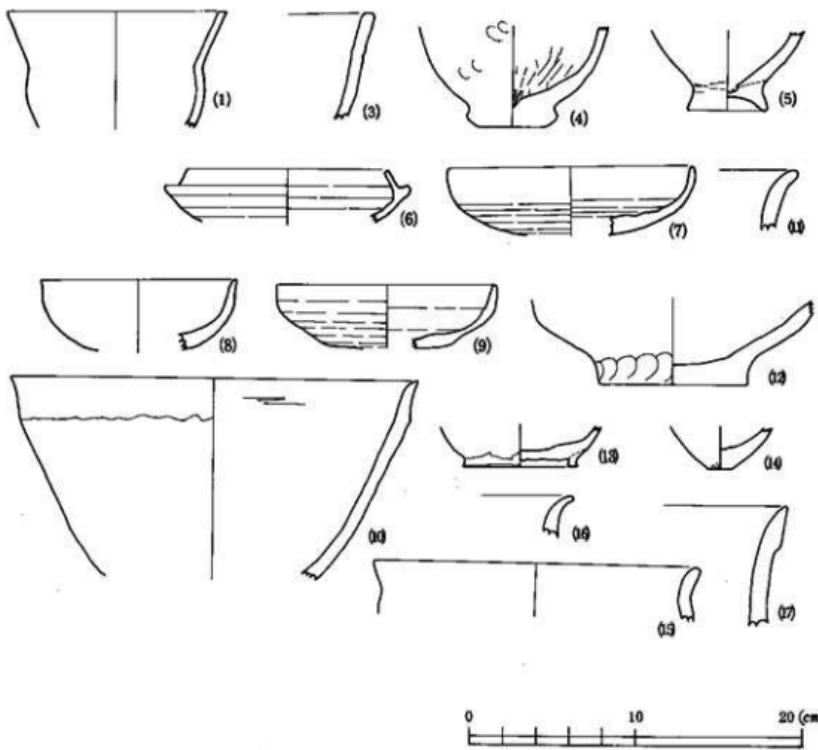




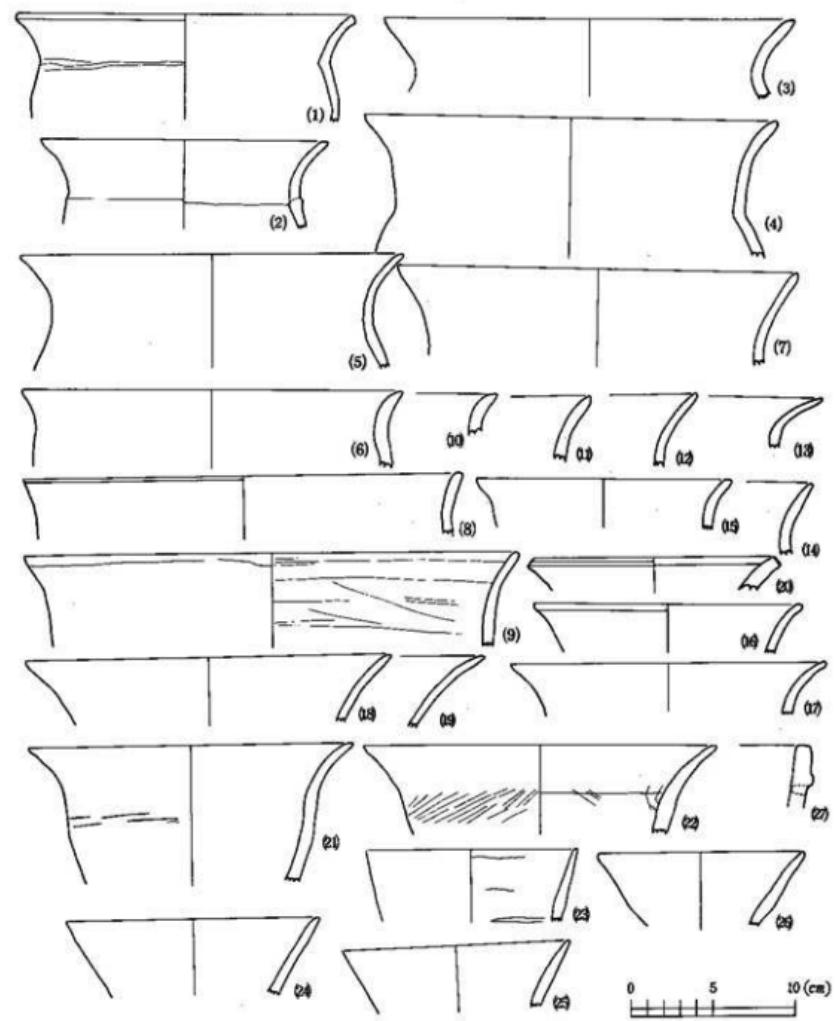
第15図 3号住居跡出土土器実測図



第16図 4号住居跡出土土器(1~13)
6号住居跡出土土器(14~16) 実測図

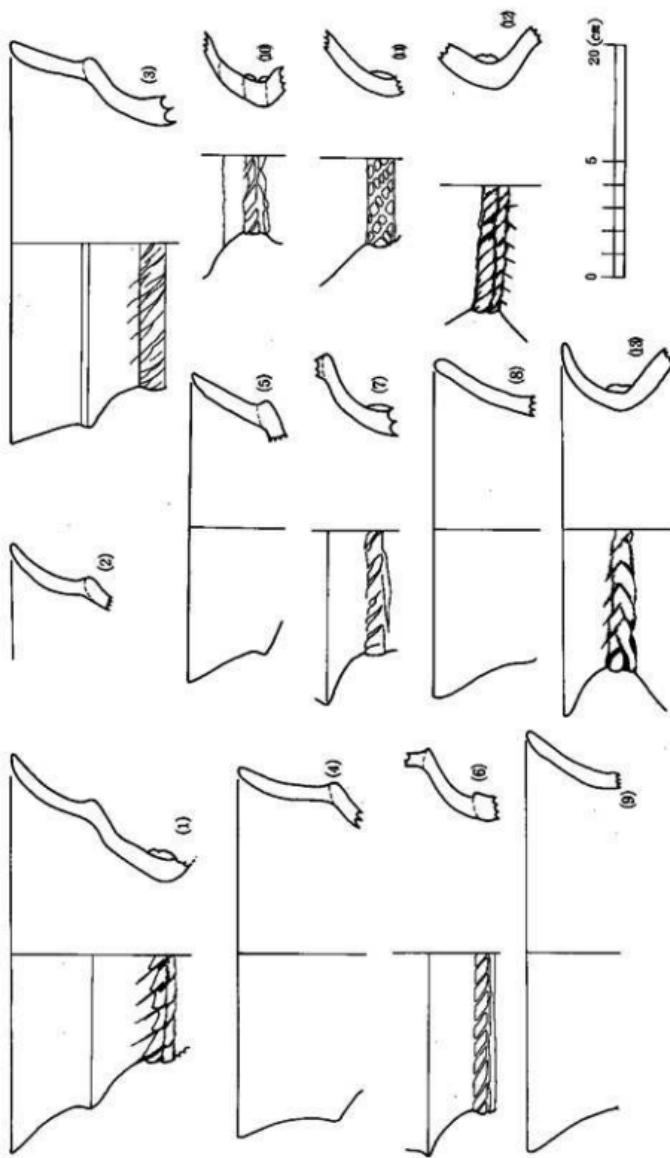


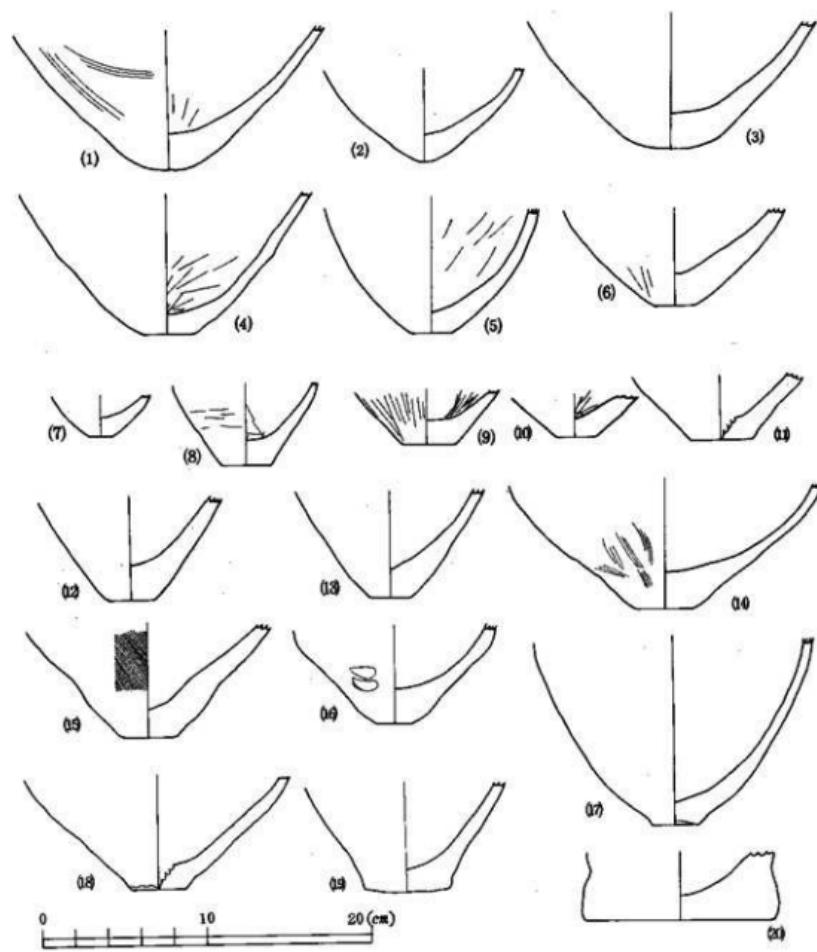
第17図 7号住居跡出土土器(1~5) 8号住居跡出土土器(6~8)
溝状遺構出土土器(9~14) ピット群出土土器(15~17) 実測図



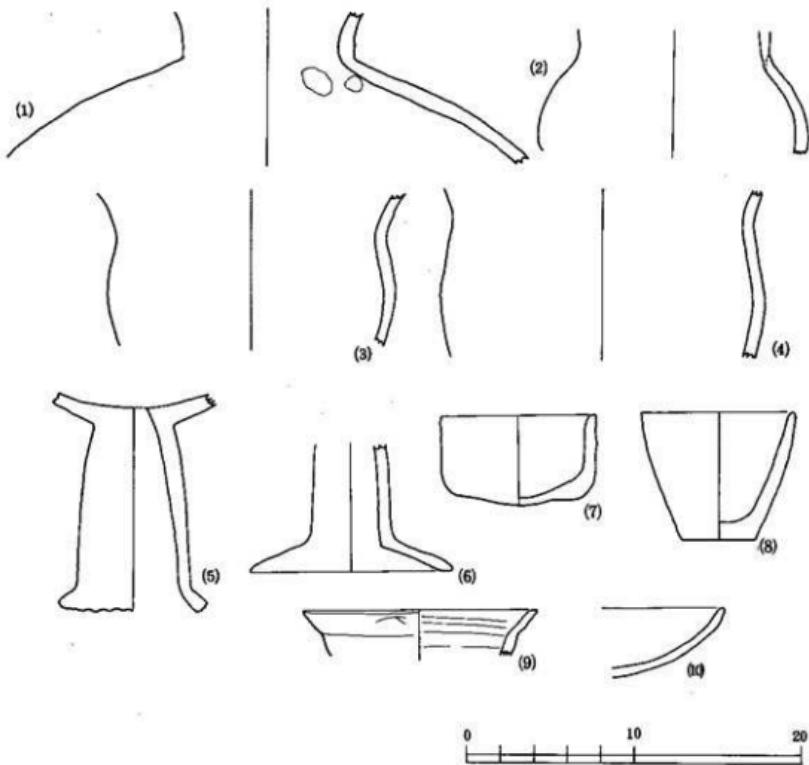
第18図 一括土器(1)実測図

圖 19 一括土器(2)測量圖

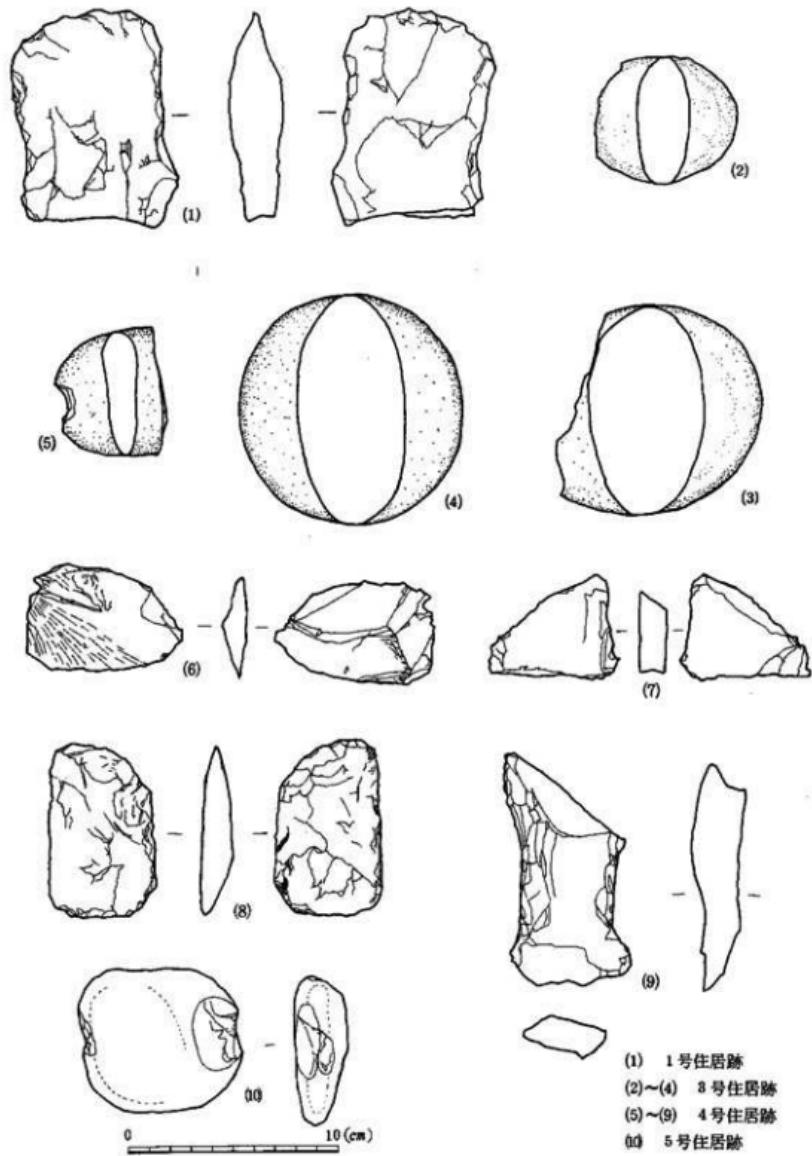




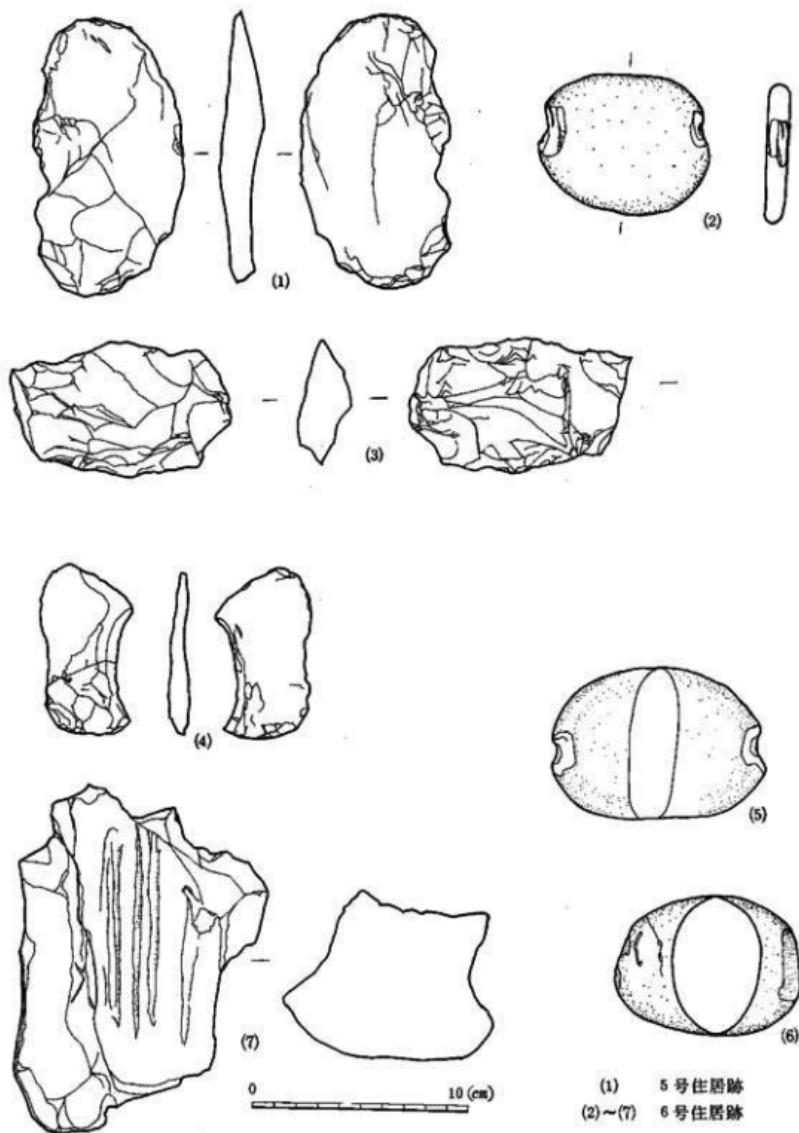
第20図 一括土器(3)実測図



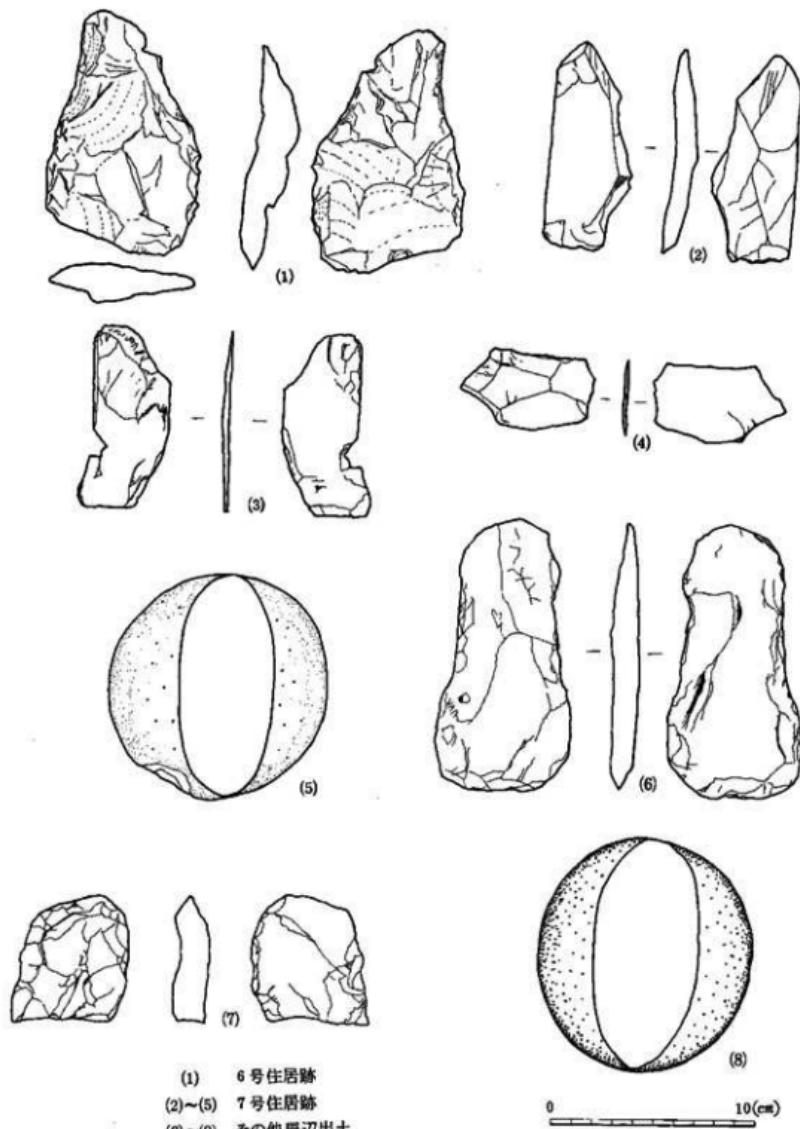
第21図 一括土器(4)実測図



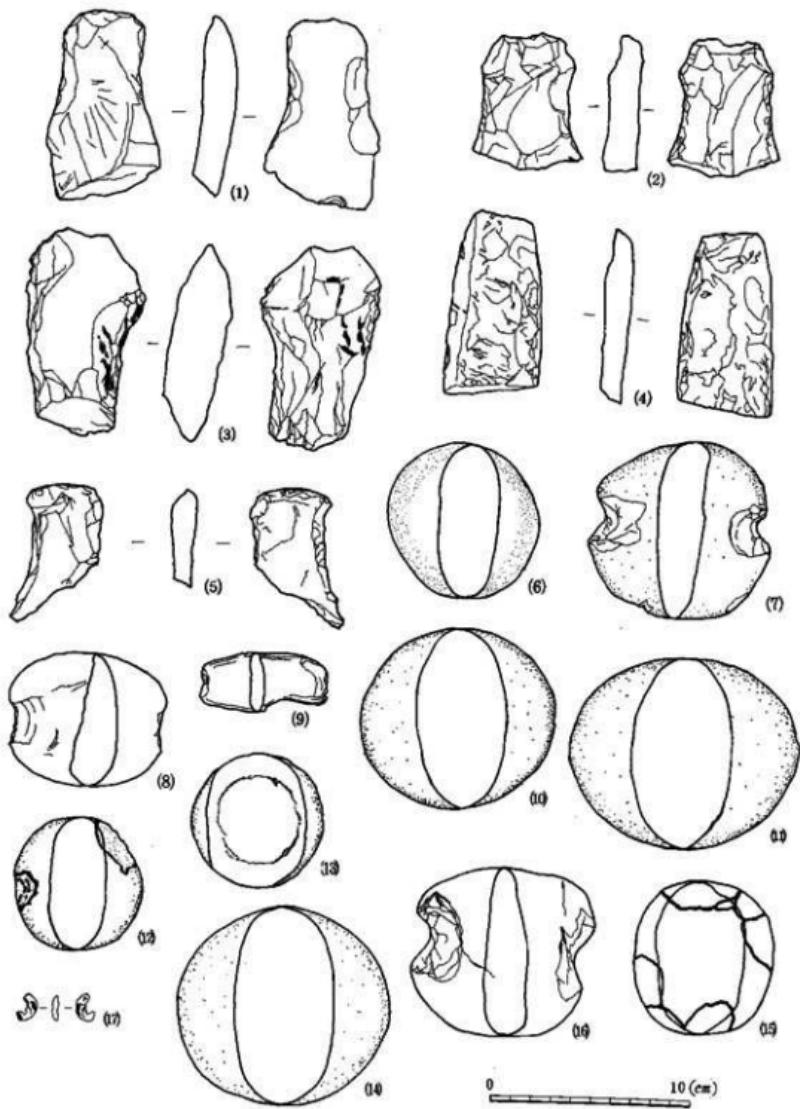
第22図 1・3・4・5号住居跡出土石器実測図



第23図 5・6号住居跡出土石器実測図



第24図 6・7号住居跡及び周辺出土石器実測図



第25図 周辺出土石器実測図

図版



(1) 表土除去作業



(2) 表土(耕作土)を除いた状況



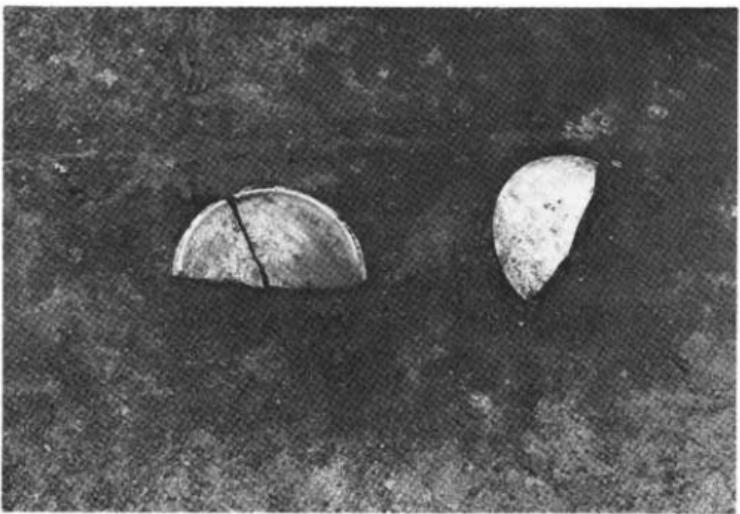
(1) 1号住居跡



(2) 1号住居跡内土師器出土狀況



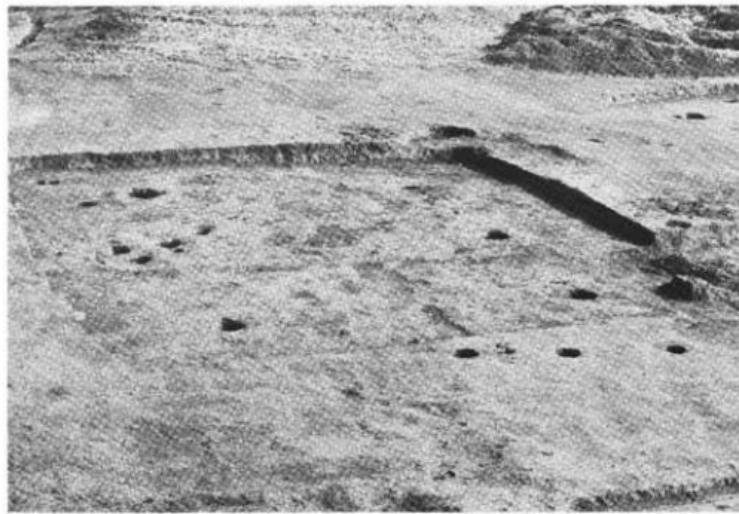
(1) 住居跡群狀況



(2) 2号住居跡出土須恵器



(1) 3号住居跡出土土師器



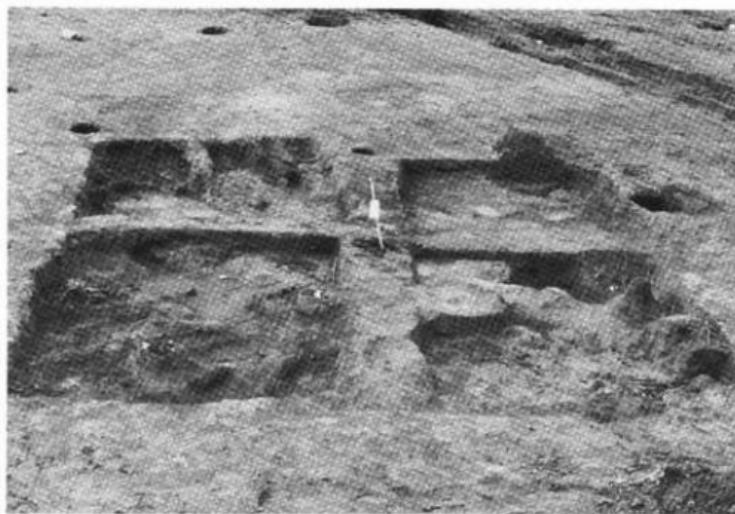
(2) 4号住居跡



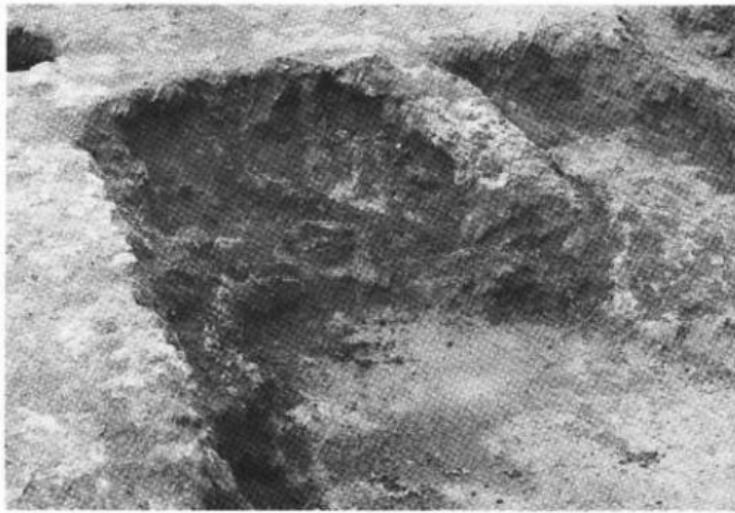
(1) 4号住居跡出土土師器



(2) 6号住居跡出土石錘



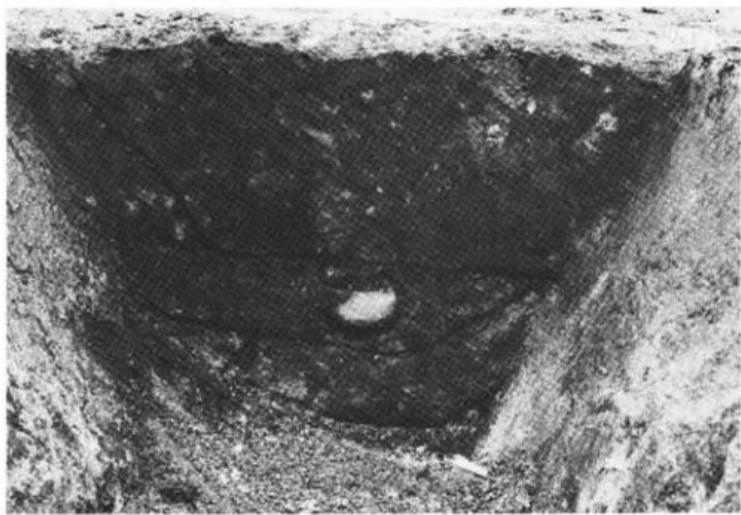
(1) 7号住居跡



(2) 7号住居跡内炭化材

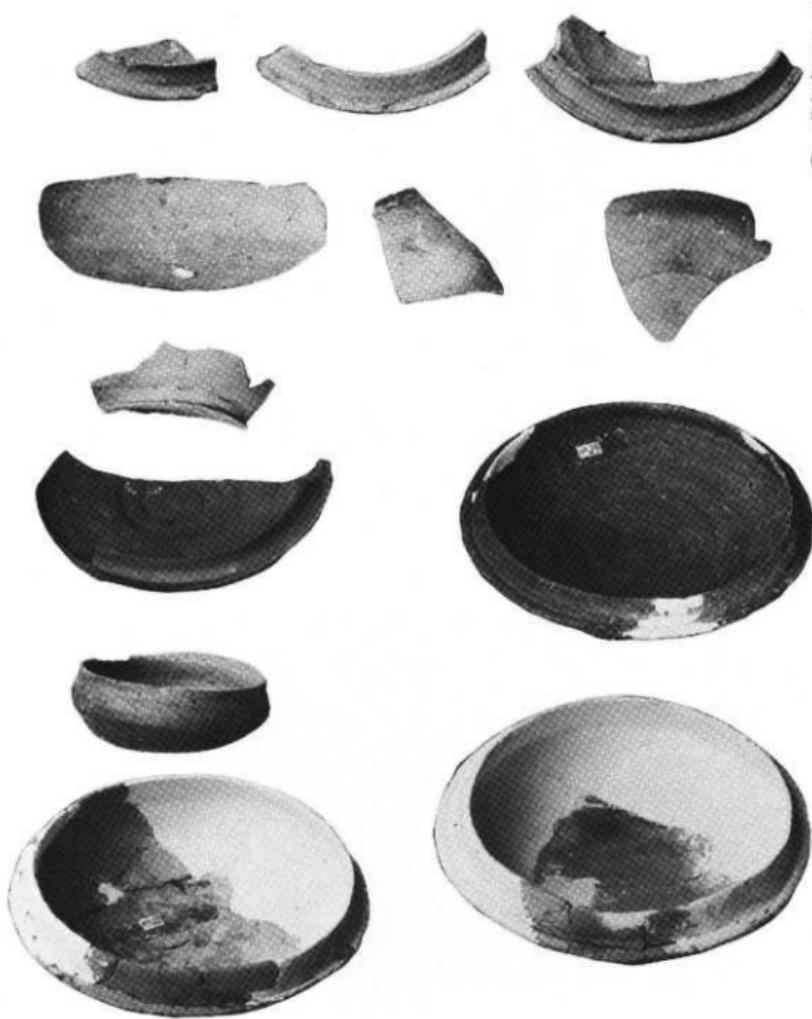


(1) 溝 狀 況



(2) 溝 堆 積 土 內 土 師 器

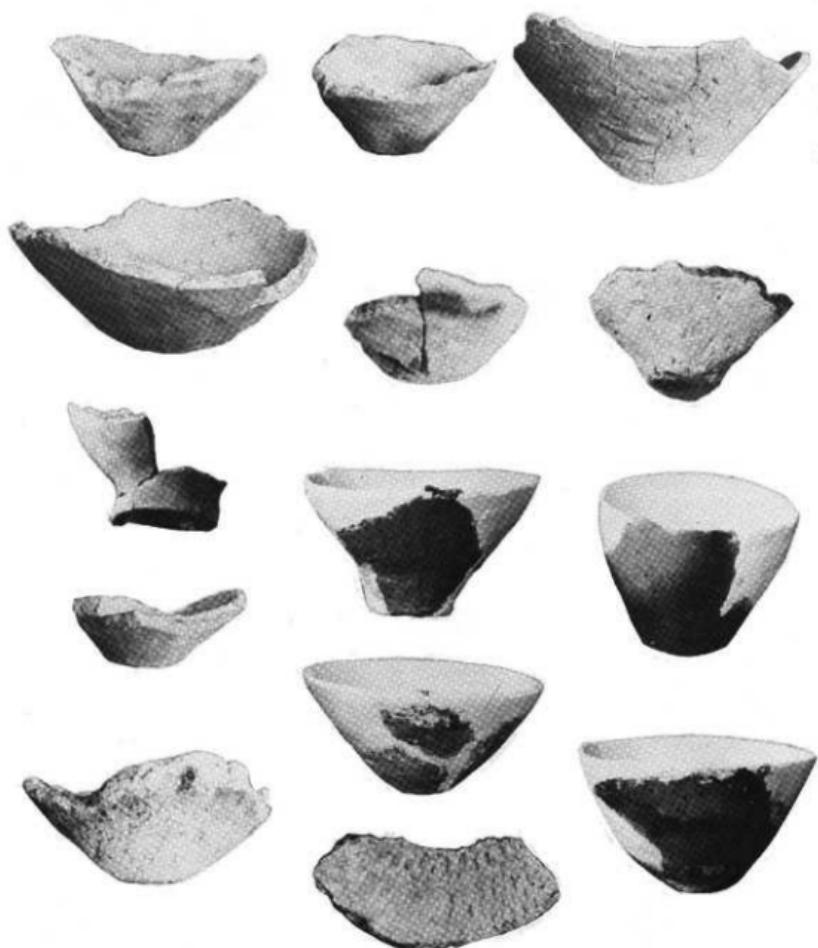
圖版8 出土土器 (1)



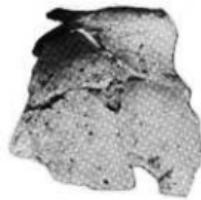
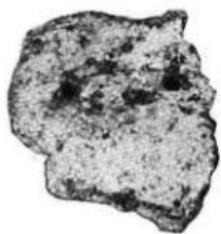
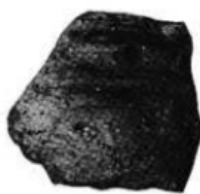


圖版 10
出土土器 (3)



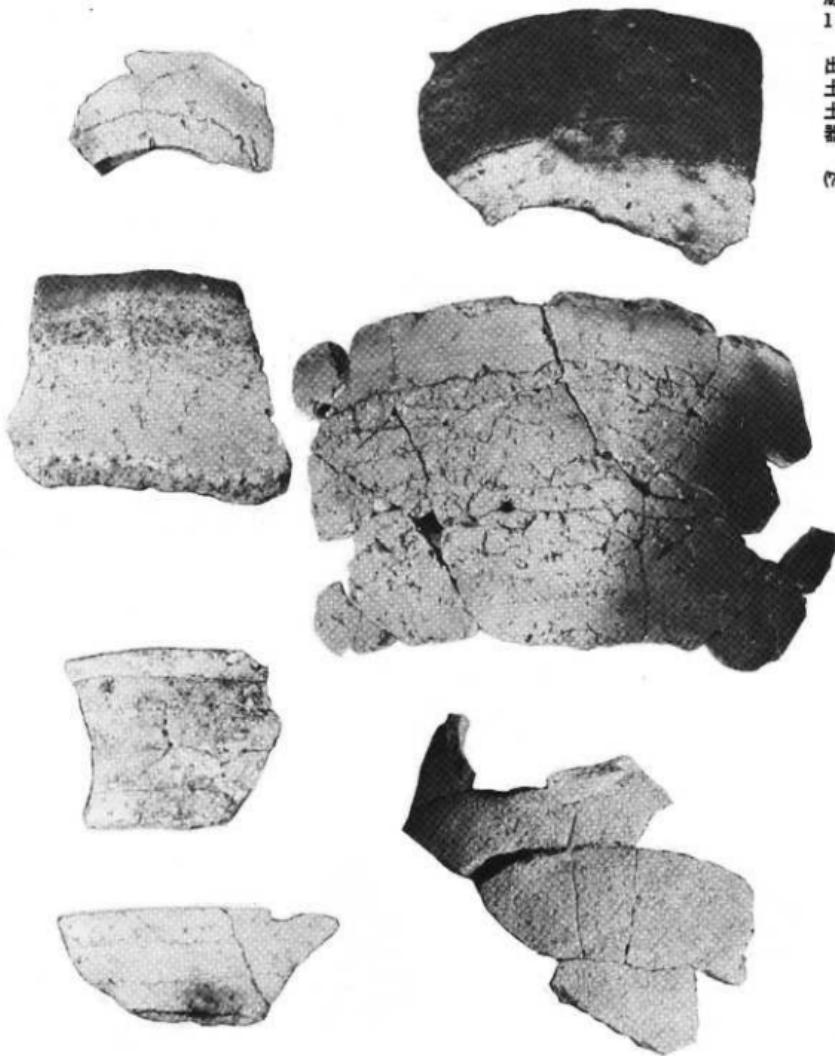


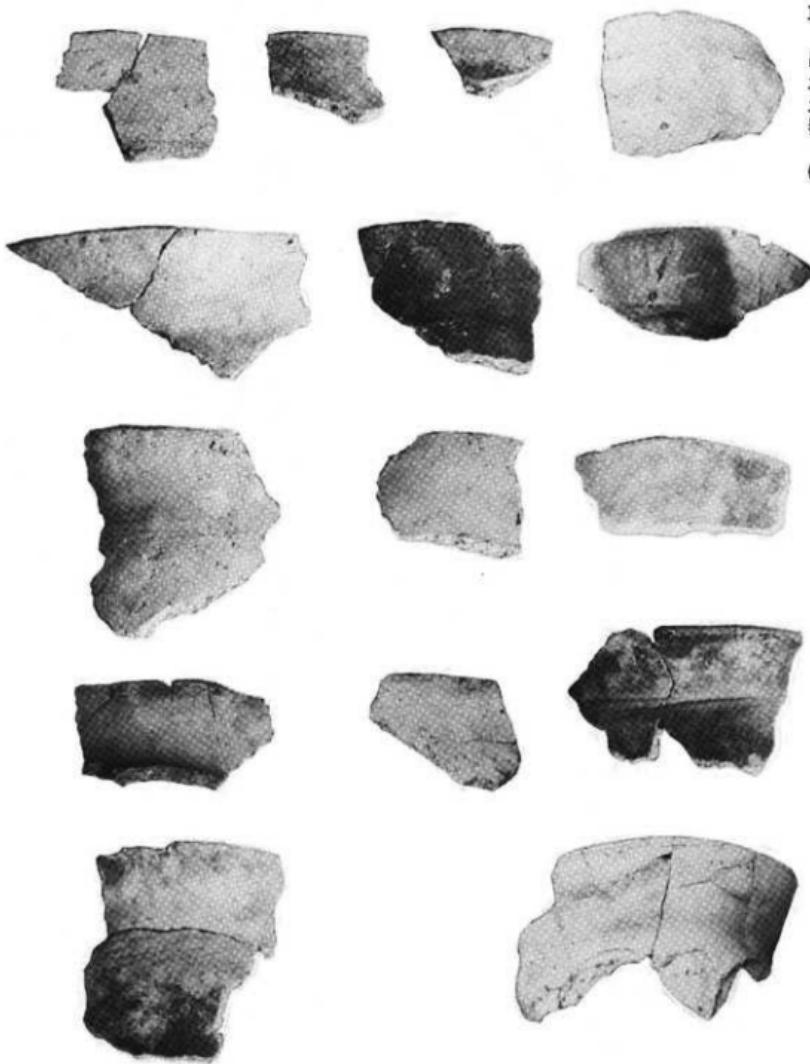
圖版 12
出土土器 (5)



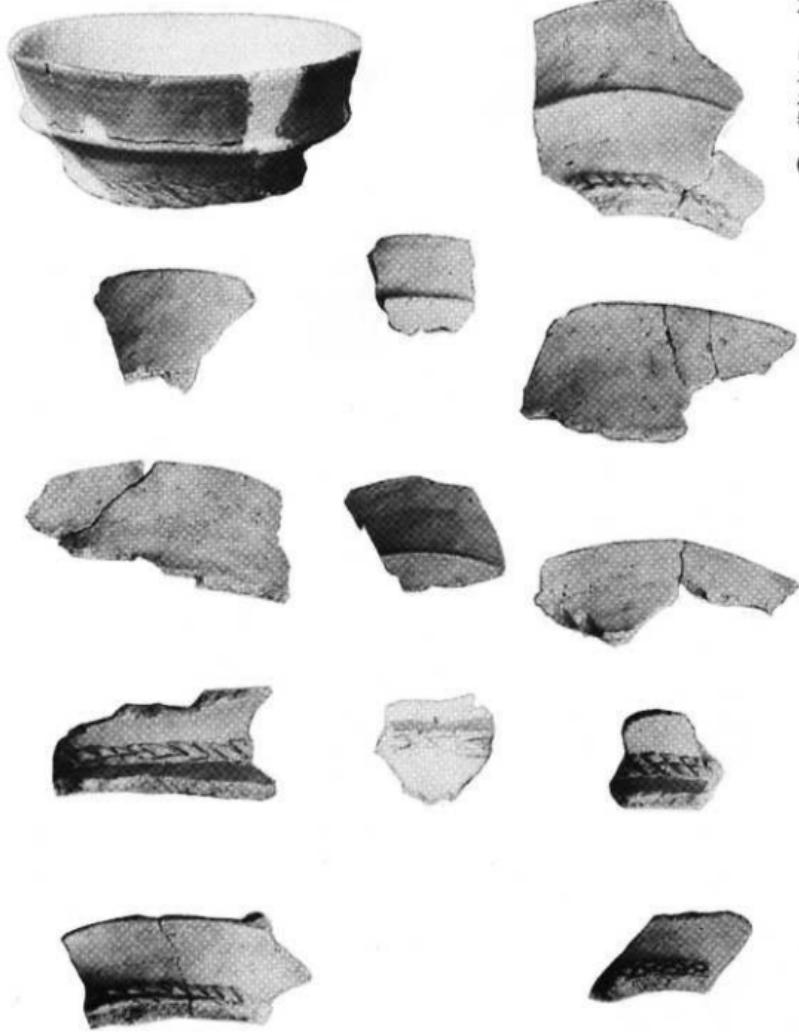


図版 14
出土土器 (3)





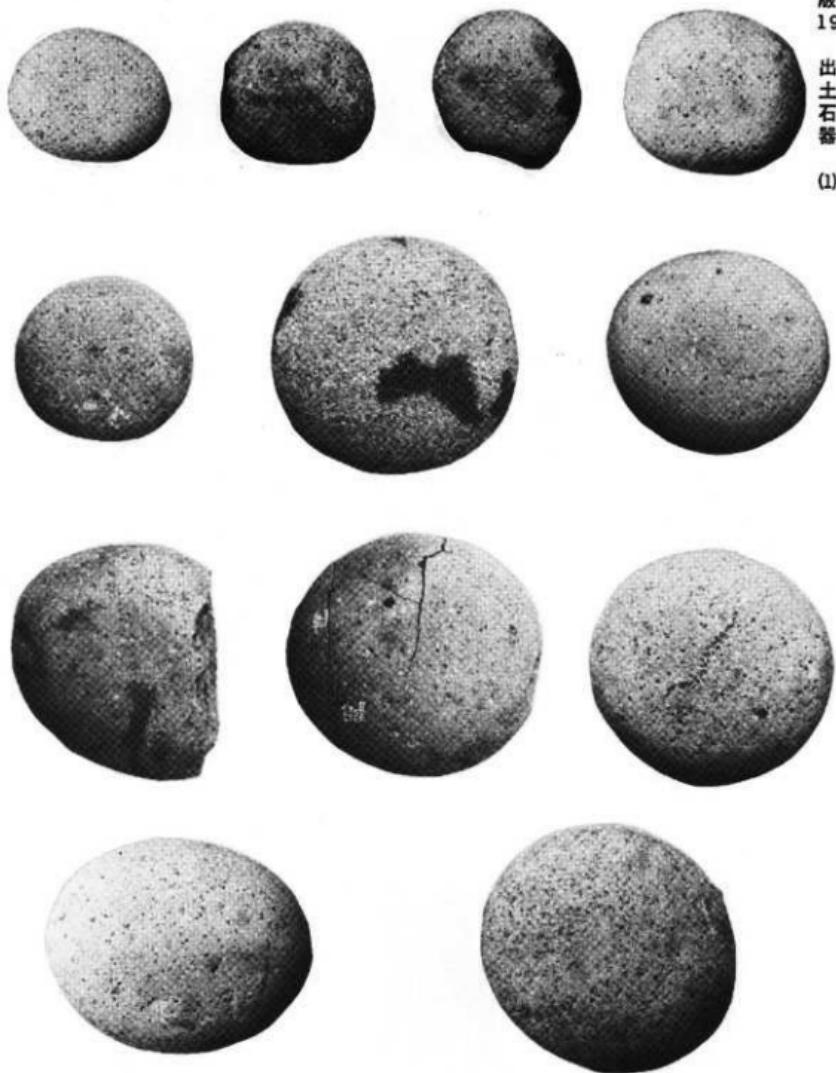
図版 16
出土土器 (9)



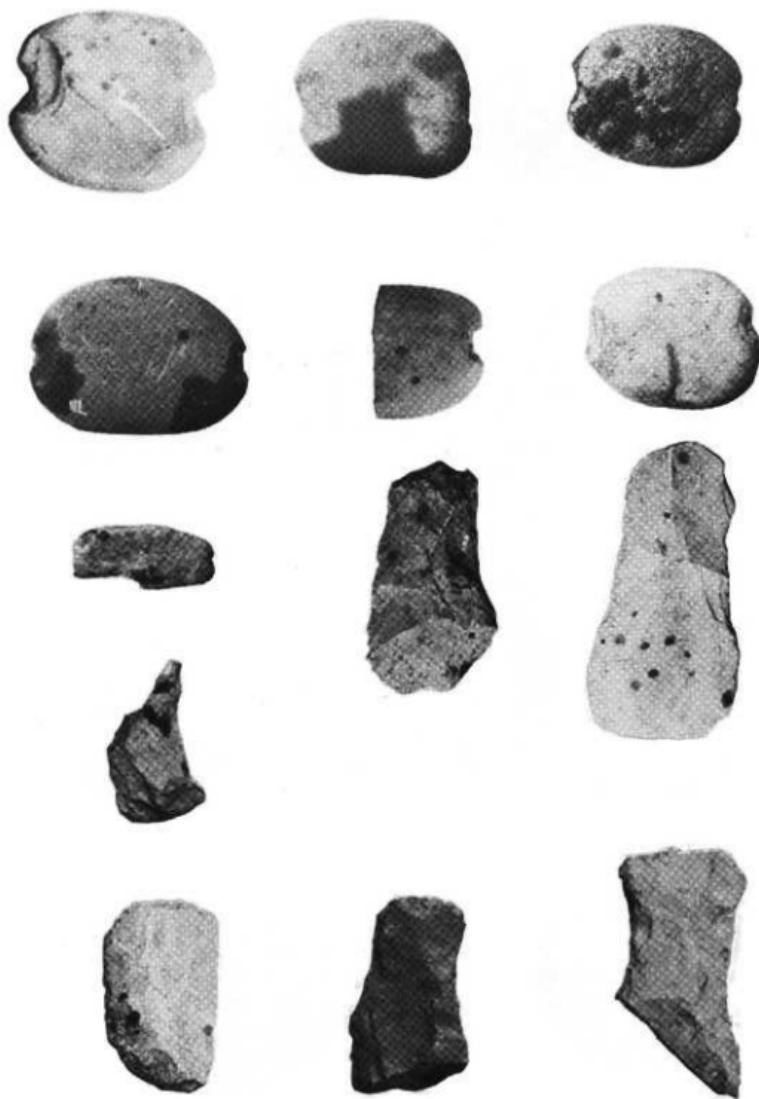


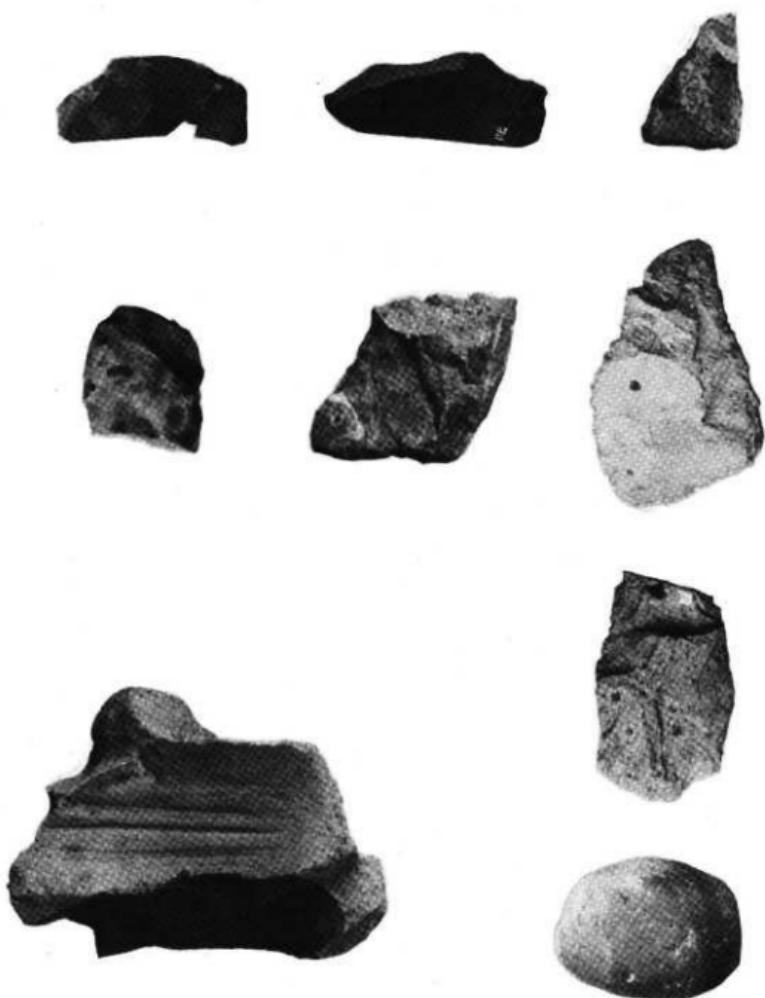
図版 18
出土土器
(1)





圖版 20
出土石器 (2)





お染ヶ岡地区特殊農地保全整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

上別府遺跡

発行 昭和55年3月31日

宮崎県教育委員会

編集 宮崎県教育庁文化課